旧約聖書概観

参考資料：新聖書注解、新聖書辞典、チェーン式聖書、聖書ハンドブック、わかりやすい旧約聖書の思想と概説、他

１．旧約聖書

聖書６６巻は、旧約聖書３９巻と新約聖書２７巻の２つに分かれています。旧約聖書は神の啓示の前半部分であり、新約聖書は後半部分です。

旧約聖書は、天地創造から紀元前４００年頃までに起こった神の救いの計画上重要な出来事とその意味を記しています。また、旧約聖書は紀元前１５００年頃から紀元前４００年頃までに書かれました。その後、４００年間神の啓示はなく、キリスト誕生後、新約聖書が書かれ、聖書は完成しました。（ヘブル１：１，２）

旧約聖書は、新約聖書において成就を目指す準備の書です。旧約聖書は、やがて来られる救い主を預言し、預言通りに、救い主イエスによって神の救いの計画が成就し、信仰義認の新しい契約が新約聖書に記されました。

アウグスチヌスは、「新約聖書は旧約聖書の中に隠されており、旧約聖書は新約聖書によって明らかにされる。」と言いました。旧新約聖書全体を通して、神の救いが啓示されているのです。

２．旧約聖書の構成

律法　5
創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記
歴史書　12
ヨシュア記、士師記、ルツ記、サムエル記Ⅰ、Ⅱ、列王記Ⅰ、Ⅱ、歴代誌Ⅰ、Ⅱ、 エズラ記、ネヘミヤ記、エステル記
詩歌　5
ヨブ記、詩篇、箴言、伝道者の書、雅歌、
預言書　17
イザヤ書、エレミヤ書、哀歌、エゼキエル書、ダニエル書、 ホセア書、ヨエル書、アモス書、オバデヤ書、ヨナ書、ミカ書、ナホム書、 ハバクク書、ゼパニヤ書、ハガイ書、ゼカリヤ書、マラキ書

３．旧約聖書の基本的思想（３つの契約）

①アブラハムへの神の約束（アブラハム契約）創世１２：１－３

アダムの罪によって、堕落したすべての人は罪の中を歩んでいました。神は、人類の中でアブラハムを選び、アブラハムの子孫を通して、神の救いの祝福を全人類にもたらすと約束されました。

②イスラエル民族との神の契約（モーセ契約）出エジプト２０：１－４

神はイスラエルの民に十戒を中心とする契約を与えられました。民は、神の教えを守ることによって、神の祝福にあずかることができ、まことの主なる神を全世界に証しすることができました。

③ダビデへの神の約束（ダビデ契約）Ⅱサムエル７：１１－１４

神は、イスラエルの民の中からダビデを選び、ダビデの子孫を通してすべての国々の民を救うことを約束されました。この神の約束は成就し、アブラハムの子孫、ダビデの子孫であるイエス・キリストが誕生しました。イエスは、十字架で人類の贖いを成し遂げ、こうして、イエスを主と信じる者を救うという神の新しい契約が成就したのです。

創世記

１．書名

聖書の最初の書物は、天地創造について記されているので、創世記と名づけられました。一方、ヘブル語の聖書では、最初の言葉「初めに」（ベレシット）が書名となっています。この書は、初めに天地を創造された神がおられ、神の贖いの視点から、人類の歴史と神の救いの計画の始まりを記しています。

２．著者と成立過程

創世記から申命記まではモーセ五書と呼ばれています。それは、これらの五書がモーセによって書かれたと考えられているからです。実際に、モーセ五書の中には、モーセが多くの部分を書いたことを述べています。創世記には、本書の著者が誰であるかを示す箇所はありませんが、モーセが他の４書と同様、著者であると考えられています。モーセは、神の御霊に導かれて、神からの直接啓示と、古代の諸記録を編集し、霊感された神のことばとしてまとめたと考えられます。

３．内容とメッセージ

創世記は、１～１１章の「初めの歴史」と１２～５０章の「族長たちの歴史」の２つに大きく分けることができます。

①神による創造　１：１，２７，３：６

神は、天地を創造され、人間を被造物の冠として神のかたちに創造されました。しかし、人間は神にそむき、罪を犯して堕落し、神のさばきを受ける者となりました。

②救い主の約束　３：１５

神は、罪を犯したアダムとエバに神のさばきを伝えると共に、やがて人類の罪を贖うために「女の子孫」である救い主を遣わすことを約束されました。この後の歴史の中で、神は「女の子孫」とは誰かを示し、神の救いの計画を明らかにしていかれます。

③アブラハムの子孫　１２：１－３，２２：１８

神はアブラハムを選び、アブラハムによって全人類を祝福するという契約を結ばれました。アブラハムは、やっと与えられたイサクをささげる出来事を通して、アブラハムの子孫によって、地のすべての国々が祝福を受けるとの約束をいただきました。神はやがて、神のひとり子イエス･キリストを同じ場所、エルサレムでささげて、人類の贖いを成し遂げられました。

④ユダの子孫　４９：９，１０

アブラハムとの契約は、イサク、ヤコブへと引き継がれました。ヤコブは神との祈りの格闘の中でイスラエルという名前をいただき、イスラエル１２部族の父となりました。やがて、エジプトの大臣となったヨセフが、飢饉の中でイスラエルの家族を救いましたが、神はヤコブを通して、ベニヤミンを命がけで守ろうとしたユダに対して、「王権はユダを離れず」と約束され、ユダの子孫から救い主が生まれることを約束されました。

＜創世記における救い主「女の子孫」の系図＞

アダム→セツ→ノア→セム→アブラハム→イサク→ヤコブ（イスラエル）→ユダ

出エジプト記

１．書名

律法の書の第２番目の書物「出エジプト記」の名前は、ギリシャ語のエクソドス（出発）からとられています。イスラエル民族のエジプト出発（脱出）は、奴隷からの解放という神の救いのみわざであり、イスラエル民族の出発点です。神ご自身もしばしば、「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。」と語られ、出エジプトがイスラエル民族と神の救いの計画においての原点であることを教えられました。

２．著者と成立過程

律法の書はモーセ五書と呼ばれ、出エジプト記もモーセが書きました。モーセは、出エジプトの指導者として、また、神からの啓示をシナイ山で直接受けた者として、この書を書きました。出エジプトの年代については、紀元前１５世紀半ばと考えられます。それは、Ｉ列王６：１にソロモンの神殿建設が出エジプト後４８０年経ってから始まったと記されているからです。

３．内容とメッセージ

出エジプト記は、大きく分けて３つに分けることができます。1)出エジプト(1-18 章)、2)律法の授与と契約(19-24 章)、3)幕屋建設(25-40 章)

①出エジプト　１４：２９，３０　ヨハネ８：３４－３６

神はエジプトで奴隷となって苦しむイスラエルの民を救うために、モーセを立てられました。そして、十の災いをエジプトに下し、ついにイスラエルの民はモーセに率いられてエジプトを脱出し、奴隷から解放され、自由の身となりました。この出エジプトの出来事は、イエス・キリストが私たちを罪の奴隷から解放してくださる神の救いにおいて、究極的に成就しました。

②過ぎ越しの子羊　１２：２１－２４　Ｉコリント５：７

十の災いの最後は、エジプト全土の初子の死でした。しかし、神はイスラエルの民に災いが及ばないように過ぎ越しのいけにえの血をかもいと２本の門柱につけるようにと言われました。そして、さばきの時に神は、血がつけられているイスラエルの家を過ぎ越され、イスラエルの民には神のさばきは下りませんでした。キリストは過ぎ越しの子羊として来られました。キリストの血は、私たちを罪からきよめ、キリストを信じる者には、神のさばきは過ぎ越されます。

③律法と契約　２４：６－８　マタイ２６：２８

神がモーセを通して民に与えた律法は、十戒(20 章)とイスラエル民族の法律(21-24 章)に分けられます。十戒はあらゆる時代のあらゆる人々が守るべき霊的、道徳的規範です。律法は契約の書とも呼ばれます。神は律法を守る者を祝福すると約束され、民は律法を守ると約束しました。そして、契約を結ぶためにいけにえの血が流されました。キリストはご自身を信じる者を義と認めるという新しい契約を成就させるため、ご自身の血を十字架上で流されました。

④幕屋　２５：８，９　ヨハネ１：１４

神は、イスラエルの民に幕屋を建設することを命じられました。幕屋は神が住まれる場所であり、神を礼拝する場所です。ここでいけにえがささげられ、罪の贖いがなされ、大祭司が至聖所に入って民のためにとりなしました。幕屋はキリストの予型でした。キリストこそ真の幕屋、真の大祭司、真のいけにえとなられました。

レビ記

１．書名

律法の書の第３番目はレビ記です。「レビ」とはイスラエル１２部族の中のレビ族のことで、彼らはレビ人と呼ばれていました。レビ人の中からアロンとその子たちが祭司として任命され、他の者は祭司の補助者となりました。このようにレビ人は、イスラエルの祭司部族として神に仕えました。本書は、レビ人が司る礼拝儀式や祭司職について多く記されているため、レビ記と名付けられました。

２．著者と成立過程

イスラエルの民がシナイ山のふもとに滞在中、神はモーセに律法を啓示されました。モーセはこれを書き記し、レビ記が完成しました。レビ記は、出エジプト記と密接につながり、出エジプト記に記された幕屋と律法の内容を完成させるために書かれました。即ち、レビ記１～１０章は幕屋についての詳細が書かれ、１１～２７章は律法についての詳細が書かれました。こうして、出エジプト記の教えはレビ記によって補完されたのです。

３．内容とメッセージ

レビ記の内容は、大きく４つに分けることができます。1)いけにえについての律法(1～7 章)、2)祭司についての律法(8～10 章)、3)汚れときよめについての律法(11～15 章)、4)様々な律法(16～27 章)

①いけにえとささげ物　１：１－３、ヘブル９：１３，１４

レビ記には、全焼のいけにえ、穀物のささげ物、和解のいけにえ、罪のためのいけにえ、罪過のためのいけにえの５種類の神へのいけにえとささげ物が記されています。人は罪を持ったままでは、聖なる神の前に出ることができません。そこで、民は罪を贖うためのいけにえをささげ、罪赦されてから、神を礼拝しました。キリストは完全ないけにえとして、ご自身を神にささげられ、人類の罪の贖いを完成されました。いけにえの律法は、キリストによって成就しました。

②祭司職　８：１―３、ヘブル９：１１，１２

神は、レビ人の中からアロンとその子たちを祭司職として聖別されました。アロンは大祭司として任命され、彼の長子へと引き継がれました。アロンの家の者は祭司として神に仕え、他のレビ人は祭司のもとで神に仕えました。キリストは、完全な大祭司として来られ、ご自分のいのちをささげて贖いを成し遂げられました。その結果、もはや祭司もいけにえも必要なくなりました。キリストは、今も大祭司として私達のためにとりなしておられます。

③聖なる国民　１９：２，Ｉペテロ１：１５，１６

神と契約を結んだイスラエルは、「祭司の王国、聖なる国民」(出エ 19:6)となるべき民でした。イスラエルが祭司の役割を果たすためには、聖なる国民となる必要がありました。神はイスラエルが聖い民となるために、律法によって聖潔の道を教えられました。キリストによって贖われた新約の民も聖なる者となることによって、この世に良き証しをすることができます。

④隣人愛　１９：１８，マタイ２２：３５－４０

レビ記には、様々な市民律法が記されていますが、その律法の中心には隣人愛の教えがあります。キリストは聖書全体が、申命記６：５の神を愛する教えとレビ記１９：２の隣人愛の教えにかかっていると教え、自らそのように生きられました。キリストの贖いが完成した今日、私たちは十戒を中心とする道徳律法以外の儀式律法や市民律法を守る必要はありませんが、その根底にある神への愛と隣人愛の教えは、今も最も大切な教えとして与えられています。

民数記

１．書名

律法の書の第４番目は民数記です。民数記の書名は、1 章のシナイ山と２６章のモアブの草原での２回にわたる人口調査に由来しています。第１回目の人口調査では、２０歳以上の男子の総数が 603,550 人、第 2 回目では 601,730 人でした。その間の 38 年間で、出エジプトを経験した 20 歳以上の民は荒野で死に、新しい世代の民が約束の地カナンに入ることができたのです。

２．著者と成立過程

民数記は、他のモーセ五書と同様にモーセによって書かれました。レビ記と同様、本書にも「主はモーセに告げて仰せられた」という表現が繰り返されています。神はモーセに語られ、モーセは神の教えを書き記しました。また、シナイ山からモアブの草原までの荒野の旅とそこで起こった出来事を書き記しました。出エジプト記の荒野での旅の後半部分が民数記に書き記されました。

３．内容とメッセージ

民数記の内容は、地理的年代的に見て、大きく 5 つに分けることができます。1) シナイ山での出発の準備(1～9 章)、2) シナイ山からカデシュまでの出来事(10～14 章)、3) 38 年間の荒野の旅(15～19 章)、4) カデシュからモアブまでの出来事(20～21)、5) モアブの草原での出来事(22～36 章)

①出エジプトから約束の地に至る旅　１１：１，２、Ｉコリント１０：１１－１３

イスラエルの民は、出エジプトの救いを経験し、約束の地カナンを目指して旅を続けました。しかし、旅の途中で様々な試練に会い、彼らは苦しみ、つぶやき、罪を犯しました。それに対し、神は民の罪をさばき、戒められました。これらの出来事は私たちにとっての、救われてから天国に行くまでの旅路の教訓となっています。私たちも信仰の旅路において様々な試練に会いますが、その時、不信仰にならずに神に信頼し、御国に向かって歩み続けることが大切です。

②信仰と不信仰　１３：２７－３０、ヘブル３：１９，４：１

モーセは、カデシュからカナンの地を探らせるために、12 人の斥候を遣わしました。40 日間の偵察から帰ってきた斥候のうち 10 人は、カナンの地には強い民がいるため攻め上れないと報告しました。一方、ヨシュアとカレブの 2 人は、神に信頼して攻め上り、その地を占領しようと言いました。結局、民は不信仰な 10 人の言葉に従い、20 歳以上の者は約束の地に入ることができませんでした。しかし、神に信頼した２人は入ることができたのです。このことは、神の国に入るためには、神に信頼する信仰がいかに大切であるかを教えています。

③キリストの贖い　２１：８，９、ヨハネ３：１４－１６

イスラエルの民が神とモーセに逆らった時、神は毒蛇を送って民をさばかれました。その時、神はモーセに青銅の蛇を作り、それを旗ざおにつけるように命じられ、その青銅の蛇を仰ぎ見る者は救われると約束されました。そして、そのとおり、青銅の蛇を仰ぎ見た者は救われました。この青銅の蛇は、来るべき救い主を表していました。イエスは、「人の子もまた上げられなければなりません。」と言われ、十字架の主を仰ぎ見る者は救われることを約束されました。

④神の賜物と召命　３３：５１－５３、ローマ１１：２９

神はイスラエルが不従順な民であるにもかかわらず、40 年間の荒野の旅において民を守り、必要を備え、約束の地へと導かれました。神は私たちに対しても同じようにしてくださいます。神の賜物と召命は私たちにとっても変わることはなく、神を信じる者を天国まで導いてくださいます。

申命記

１．書名

律法の書の第５番目は申命記です。「申命」とは「重ねて命令する」という意味です。モーセは約束の地を目の前にして、神のみもとに旅立っていかなければなりませんでした。一方、約束の地に入る第２世代は、出エジプトの経験もシナイ山での律法授与の経験もありません。そこでモーセは民が約束の地に入るに当たり、律法を整理し、重ねて命令し、神との契約を更新したのです。

２．著者と成立過程

申命記は、他のモーセ五書と同様にモーセによって書かれました。申命記は民数記の終りの部分に続く内容であり、創世記から始まった律法の書の結論部分でもあります。モーセは、約束の地に入ろうとするイスラエルの民に対して決別説教を行い、律法を守る者への祝福と守らない者への刑罰を教え、神の御声に聞き従って生きるように教えました。このモーセの教えは預言でもあり、この預言はイスラエルの歴史において成就していきました。

３．内容とメッセージ

申命記の内容は、４つの説教とモーセの生涯の締めくくりの部分に分けることができます。1）モーセの第１の説教（1～4 章）、2)モーセの第 2 の説教(5～26 章)、3）モーセと長老の説教(27～28 章)、4)モーセの第 3 の説教(29～30 章)、 5）モーセの生涯の締めくくり(31～34 章)

①主を愛せよ　６：４，５　マタイ２２：３６－４０

モーセは民に十戒を教え、また約束の地における様々な規定を教えて、神の命令に聞き従うようにと命じました。そして、全身全霊をもって主を愛するようにと教えました。イエスは、聖書の中で大切な第１の戒めは主を愛することであり、隣人愛の教えと共に、聖書の教えの中心であることを教えられました。

②全行程を覚えよ　８：２，３　Ｉコリント１０：１１

モーセは約束の地に入ろうとする新しい世代の民に、荒野での４０年間の全工程を覚えよと教えました。過去の神の恵みを覚え、失敗を反省して、主のことばに従って生きることこそ、神の祝福を受ける秘訣です。私たちもイスラエルの荒野の全行程を教訓とし、また自分の今までの人生の歩みを教訓として、主の口から出るすべてのことばに従って生きることが大切です。

③祝福とのろい　２７：２６、２８：１，２　ガラテヤ３：１３

モーセは、主の御声に聞き従う者は祝福され、主の御声に聞き従わない者はのろいを受けると教えました。この預言的な教えは、イスラエルの歴史の中で成就し、イスラエルの民は捕囚と帰還を経験しました。この祝福とのろいの教えは今日も変わりませんが、新約時代には、キリストが私たちの罪に対するのろいをすべて十字架上で引き受けてくださいました。この結果、キリストの贖いを信じる者は罪の赦しをいただいて、キリストを通して神の祝福の中に歩むことができるのです。

④いのちを選ぶ　３０：１９、２０　ヨハネ１４：６

モーセは、約束の地に入ろうとするイスラエルの民に対し、神との契約を更新し、主を愛し御声に聞き従い、いのちを選ぶようにと勧めました。新約時代の新しい契約においては、十字架で罪の贖いを成し遂げ、救いの道を開いてくださった、いのちの主イエスを信じることが、いのちを選ぶ道です。その上で、主を愛し、御声に従っていく信仰生活が始まっていきます。

ヨシュア記

１．書名

ヨシュア記は、イスラエルがカナンの地を占領し、部族ごとに土地を分割した時の記録です。この時の指導者がヨシュアだったので、この書はヨシュア記と呼ばれます。旧約聖書第２部の歴史書は、ヨシュア記からエステル記までの１２冊です。歴史書は、次の３つに区分することができます。①ヨシュア、士師、ルツ（部族政治）②サムエル、列王、歴代（王政）③エズラ、ネヘミヤ、エステル（捕囚と帰還）

２．著者と成立過程

本書の著者は、伝統的にヨシュアと考えられています。但し、２４章にはヨシュアの死が記されているので、ヨシュアの死後、ヨシュアが書き記した資料をもとに編さんされと考えられます。モーセの後継者として立てられたヨシュアは、約束の地カナンにイスラエルの民を導き入れ、カナンの地を占領し、土地を分割します。この間の約２５年間の出来事が記されています。

３．内容とメッセージ

ヨシュア記の内容は大きく４つに分けることができます。①カナン侵入（1～5 章）、②カナン征服(6～12)③カナンの地の分割(13～22 章)④ヨシュアの晩年(23～24 章)

①神の贖いの計画　１：１－３　ルカ２３：４２，４３

イスラエルのカナンの地の占領は、神の贖いの計画に基づいた特別な出来事であり、外国侵略の一つと解してはなりません。ヨシュアがイスラエルの民を約束の地に導いたことは、やがて救い主イエス（ヨシュアのギリシャ語）がご自分を信じる者を天国へと導かれる原型となりました。また、イスラエルのカナン占領の理由には、カナン人の罪に対する神のさばきという意味がありました。神はイスラエルを用いてカナン人をさばかれたのです。（創世 15：16）

②信仰による勝利　６：２０，２１　ヘブル１１：３０，３１

ヨルダン川を渡ったイスラエルの民は、まずエリコを攻め落とさなければなりませんでした。神はエリコ攻略の方法を教えられました。それは７日間祭司と戦士が町の周りを回り、７日目は７度回るというものでした。民は神のことばを信じ、そのとおりにすると、城壁は崩れ、イスラエルはエリコを占領することができました。このことは約束の地に入るためには信仰が必要であることを教えています。私たちも、主イエスを信じる信仰によって、天の御国に入ることができるのです。

③罪による敗北　７：１１－１３　ローマ６：２３

エリコでの勝利も束の間、次のアイとの戦いではイスラエルは敗北しました。それは、アカンが聖絶すべきものを取って、罪を犯したからです。アカンの罪によって、神はご自身の働きを止めてしまわれました。イスラエルがアカンを罰し、罪を除き去った時、再び神は働かれ、イスラエルはアイを攻め取ることができました。今日も、罪があるところには神の祝福はありません。イエスの血によって、罪がきよめられ取り除かれる時に、神の祝福と勝利がもたらされます。

④主に仕える　２４：１５、２４、２５　ヨハネ１２：２６

ヨシュアは全部族をシェケムに集め、律法を守り行い、主の御声に聞き従い、主に仕えるようにと勧めました。そして、民は神との契約を更新し、それぞれの相続地に向っていきました。新しい契約の民である私たちも、みことばに従い、主イエスに仕えて生きるならば、神の祝福にあずかることができるのです。

士師記

１．書名

歴史書の第２番目は士師記です。士師記はヨシュアの死後からサムエル誕生前までの約３００年間の出来事を記しています。この時代、イスラエルでは１２人のさばきつかさ（士師）の活動を中心に歴史が展開していったので、この書は士師記と呼ばれます。

２．著者と成立過程

本書には、著者を記す個所はありませんが、伝統的にサムエルと考えられています。「そのころ、イスラエルには王がなかった。」という表現から、王政時代初期に編さんされたと考えられます。士師の時代はイスラエルの国を統一する指導者はおらず、各部族は独立した行動をとる傾向にありました。その状況下で混乱するイスラエルに、神はさばきつかさを起こし、民を救われました。

３．内容とメッセージ

士師記には次のようなイスラエルの罪と神の救いのパターンが記されています。

⇒民の背信の罪⇒神のさばき⇒民の祈り⇒さばきつかさによる救い⇒

このパターンが繰り返される中で、イスラエルはますます堕落していきました。そのような中でも、神は民をあわれみ、１２人のさばきつかさを遣わして民を救われました。（オテニエル、エフデ、シャムガル、デボラとバラク、ギデオン、トラ、ヤイル、エフタ、イブツァン、エロン、アブドン、サムソン）

①民の罪と神の怒り　２：１２－１４　ローマ３：２３－２５

ヨシュアの死後、イスラエルの民は主の命令に従わず、先住民を完全に追い出しませんでした。その結果、民は異邦人の影響を受け、主を捨て、偶像礼拝をするようになりました。神はイスラエルを怒り、異邦人の手に彼らを渡し、民は苦しみました。神は罪を憎まれ、罪の中にいる者を祝福されません。私たちも、キリストの贖いを信じ、罪赦されることによって、神の祝福の中に入ることができます。

②主のあわれみ　２：１８　ヘブル４：１５，１６

イスラエルは、異邦人に支配されて苦しむと、神に救いを求めて叫びました。すると、神は民をあわれんで、さばきつかさを起こし、民を救われました。主イエスは私たちの大祭司として、どんなときにも私たちの祈りを聞き、私たちをあわれんで助けを与えてくださいます。

③信仰によって　１６：２８　ヘブル１１：３２

士師記のさばきつかさは、必ずしも立派な人物ではありませんでした。しかし、この混乱の時代、神は彼らの信仰を用い、彼らによってイスラエルを敵の手から救われました。今日も神は私たちの信仰を見られ、信仰を用いられます。信仰によって神に仕えるものとなりましょう。

④神のみこころ　２１：２５　ローマ１２：２

めいめいが自分の目に正しいと見えることを行った士師記の時代は、堕落と混乱の時代でした。今日の時代も同じ状況ではないでしょうか。そのような中でクリスチャンが、地の塩、世の光としてまことの神を証しするためには、この世と調子を合わせず、神のみこころに従って生きることが必要です。

ルツ記

１．書名

歴史書の第３番目はルツ記です。ルツはモアブ人であり、モアブ人はロトの子孫で、ケモシュという神を信じる異邦人でした。しかし、ルツは夫や姑を通して真の神を知り、信仰によってナオミと共にユダのベツレヘムにやってきました。そして、神の摂理の中でボアズと結婚し、彼らの子孫からダビデ、そしてキリストが生まれました。本書はこの書の主人公であるルツの名が書名としてつけられました。

２．著者と成立過程

本書には著者を記す個所はなく、著者は不明です。ユダヤ人の伝承によればサムエルと言われています。ルツ記は「さばきつかさが治めていたころ」の出来事であり、ダビデの系図まで記されているので、おそらくダビデの時代に執筆または編さんがなされたと考えられます。士師の時代は信仰的にも道徳的にも堕落していく時代でしたが、その中でも神を信じる人々の敬虔な生き方があったことがわかります。

３．内容とメッセージ

ルツ記は、４章を次のように分けることができます。１章：モアブへの移住と帰郷、２章：ボアズの畑で落ち穂を拾うルツ、３章：ルツのボアズに対する求婚、４章：ボアズの買い戻し

①ルツの信仰　１：１６，１７　マタイ１：５，６

エリメレクの家族は、真の神を信じているのに、次々と不幸に会いました。その中にあっても、エリメレクの家に嫁いできたルツは、主なる神を信じ、ナオミと共にベツレヘムにやってきました。神はルツの信仰と愛に応えられ、ボアズとの結婚に導かれ、キリストの系図の中に入れてくださいました。

②神の摂理　２：３　ローマ１１：３６

ナオミと共にベツレヘムに来たルツは、生活のために落ち穂拾いを始めました。ルツが出かけて行った畑は、はからずも買い戻しの権利のある親戚ボアズの畑でした。このことは人間的には偶然のように見えても、すべてを治めておられる神の摂理の中で起こった出来事でした。神は摂理の中で、永遠の救いの計画を実行しておられたのです。

③ボアズの信仰　３：９－１１　Ｉコリント１６：１３，１４

ボアズは主なる神を信じる信仰者でした。その信仰によって、ルツに親切にし、ルツの求婚に対しても誠実に対応しました。ボアズは律法に従って、まず第１の買い戻しの権利のある親類に知らせました。そして、彼がボアズに権利を譲った時、ボアズは喜んでナオミの土地を買い戻し、ルツと結婚しました。そして、彼もルツと共にキリストの系図の中に入れられました。

④神の贖いの計画　２：２０　ルカ１：６８，６９

ルツ記には、「贖い」という大切な聖書の思想が教えられています。買い戻すという言葉は贖いを意味する言葉が使われ、買い戻しの権利のある親類には、贖う者を意味する言葉が使われています。ボアズは贖う者として、ナオミの土地を贖い、ルツを贖って結婚したのです。ボアズは人類を贖うイエス・キリストの型であり、ボアズの家系からダビデが生れ、キリストへとつながっていったのです。

Ｉサムエル記

１．書名

歴史書の第４番目はＩサムエル記です。サムエル記はヘブル語聖書では１冊の書物でしたが、旧約聖書がギリシャ語に訳されたときに２巻に分けられました。サムエルは、最初の預言者、最後の士師、そして祭司として、その時代を導き、サウルとダビデに王としての油を注ぎ、王国形成のために重要な役割を果たしました。そこで、この書物にサムエルの名がつけられました。

２．著者と成立過程

サムエル記は、ＢＣ１０５０～９５０年頃までの歴史的出来事を取り扱っています。Ｉ歴代 29：29 には、ダビデの業績はサムエル、ナタン、ガドの３人の言行録に記されているとあります。そのことから推測するとこれら３人の資料を基に、王国分裂後前９世紀頃に編さん者がまとめたと考えられています。

３．内容とメッセージ

本書は大きく３つに区分することができます。１）サムエル１～７章　２）サムエルとサウル王８～１５章　３）サウル王とダビデ１６～３１章

①サムエルの統治　７：１２，１３　ヘブル１１：３２

母ハンナの祈りによって生まれたサムエルは、祭司エリの下で成長し、やがて最初の預言者、最後の士師、そして祭司として活躍しました。サムエルは、ペリシテ人の圧政からイスラエルを救いましたが、それまでの士師とは違い、彼は神のことばと祈りによってイスラエルを救い、治めました。そして、士師の時代から王の時代に向かう過渡期にあるイスラエルを信仰によって導きました。

②王制導入　１２：１３，１４　黙示１９：６

サムエルが年老いたとき、民はイスラエルに王を立てることを求めました。サムエルはこの民の願いを気に入りませんでしたが、神に祈ると神は王を立てるようにと命じられました。サムエルは神の導きに従い、サウルに油を注ぎ王としました。サムエルは、イスラエルでは民も王も神のしもべとして、神に服従する王制でなければならないと教えました。

③サウルの不従順　１５：１１　ピリピ２：８

イスラエル最初の王となったサウルは、初めは謙遜な姿勢を示しましたが、その後高慢になり、主のみ声に聞き従わなくなりました。サウルは、まずサムエルが来るまで７日待つようにという命令に従わずに自分でいけにえをささげ、次にアマレク人を聖絶せよとの神の命令に従わなかったことにより、神への不従順を表しました。その結果、神はサウルを王位から退けられました。神への従順こそ、最高のささげ物です。

④ダビデの信仰　２４：６　ローマ１０：１１

サムエルは、サウルに代わって、ダビデを王とするために油を注ぎました。しかし、ダビデが王となるまでには、長い信仰の訓練の期間がありました。サウルからいのちを狙われて逃亡生活を送っている間、ダビデには２回サウルを殺すチャンスがありました。その時、ダビデは主に信頼し、油注がれたサウルに手を下しませんでした。神はこのようなダビデの信仰に応え、彼を守り、時至ってダビデを王とされました。

Ⅱサムエル記

１．書名

歴史書の第５番目はⅡサムエル記です。サムエル記はヘブル語聖書では１冊の書物でしたが、旧約聖書がギリシャ語に訳されたときに２巻に分けられました。本書はダビデ王の働きを記していますが、ダビデもサウル同様サムエルから王としての油注ぎを受けました。サムエルは士師、預言者、祭司として、士師時代と王国時代をつなぐ重要な役割を果たしました。そこで、この書物にサムエルの名がつけられました。

２．著者と成立過程

サムエル記は、ＢＣ１０５０～９５０年頃までの歴史的出来事を取り扱っています。ダビデは BC1011 年頃に王となり、４０年間王として治めたので、本書ではその時代が記されています。Ⅰ歴代 29：29 には、ダビデの業績はサムエル、ナタン、ガドの３人の言行録に記されているとあります。そのことから推測するとこれら３人の資料を基に、王国分裂後前９世紀頃に編さん者がまとめたと考えられています。

３．内容とメッセージ

本書は大きく３つに区分することができます。1）１～８章　ダビデ王国の確立　2）９～２０章　ダビデの罪とその結果　3）２０～２４章　付録

①ダビデ王の統治　５：４，５　Ⅰコリント１０：１３

サウルの死後、ダビデはヘブロンに行きユダの王となりました。一方、イスラエルはサウルの子イシュ・ボシェテを王としましたが、彼は殺され、ダビデはエルサレムで全イスラエルの王となりました。ダビデはサムエルから油を注がれてから王になるまで、長い試練の期間を過ごしましたが、神に信頼して耐え忍びました。神もダビデに脱出の道を備えられ、ついにダビデは王となることができました。

②ダビデの子孫　７：１２，１３　マタイ１：１

ダビデはエルサレムを首都とし、神の箱をエルサレムに移し、ここに神殿を築きたいと願いました。これに対し、神はダビデに世継ぎの子（子孫）を起こし、彼の王国を永遠に確立させると約束されました。この約束はダビデ王朝の祝福の約束であると共に、救い主がダビデの子孫として生まれ、救い主によって神の国が確立するという約束です。この約束通り、イエス・キリストはダビデの子孫として生まれました。

③ダビデの罪と悔い改め　１２：１３，１４　Ⅰヨハネ１：９

ダビデ王国が絶頂期を迎えたとき、ダビデは悪魔のわなに引っかかり、姦淫と殺人の罪を犯してしまいました。神はナタンを遣わしてダビデの罪と神のさばきを伝えられると、ダビデは罪を悔い改めました。ダビデは自分が蒔いた罪の刈り取りをしなければなりませんでしたが、神は心から悔い改めたダビデの罪を赦されました。その結果、ダビデは最後まで神に仕えることができました。

④神殿の場所　２４：２４，２５　マタイ２７：５０、５１

ダビデは人口調査を行って罪を犯し、その結果、神罰が下りました。その時、預言者ガドの言葉に従って、アラウナの打ち場を買い取り、祭壇を築きました。ダビデはここに神殿を建てることを計画し、ソロモンがこの地に神殿を建てました。この場所は、アブラハムがイサクをささげたモリヤの地であり（Ⅱ歴 3:1）、後にピラトがイエスをさばいた場所です。イエスの十字架の死によって、神の救いは成就しました。

Ｉ列王記

１．書名

歴史書の第６番目はＩ列王記です。列王記はヘブル語聖書では 1 冊の書物でしたが、サムエル記同様、旧約聖書がギリシャ語に訳されたときに２巻に分けられました。列王記はソロモンの治世から分裂王国時代の歴史を記しています。この間北イスラエル王国では１９人の王、南ユダ王国では２０人の王によって治められたので、この書は列王記と名付けられました。

２．著者と成立過程

列王記は、ＢＣ９６０～５６０年頃までの４００年間の歴史を取り扱っています。その間にソロモンと南王国の２０人の王（BC931～586 年）、北王国の１９人の王（BC931～721 年）の治世が記されています。Ｉ列王記はソロモンの４０年の治世と王国分裂後の８０年の歴史が取り扱っています。列王記の著者がだれかはわかりませんが、BC５５０ 年頃に幾つかの資料を用いて一つの書物としてまとめたと考えられます。

３．内容とメッセージ

本書は大きく３つに区分することができます。1）１～１１章　ソロモンの治世　2）１２～１６章　分裂王国の初期　3）１７～２２章　エリヤの活躍

①神殿建築　８：２７～２９　ヨハネ２：１９～２１

ダビデの王位を継いだソロモンは、７年を費やしてエルサレムに神殿を建てました。それは神がダビデに与えられた約束の成就でもありました。ソロモンは神殿の献堂式の際に、この宮が祈りの場となることを神の前に祈りました。イエスは宮清めの後、ご自分こそ神殿であることを復活の預言の中で語られました。今日、私たちはイエスを通して、どこででも霊とまことによる礼拝をささげることができます。

②繁栄と衰退　１１：５，６　マタイ６：２９，３３

ソロモンは知恵と権力を用いて、王国を栄えさせました。しかし、栄華を窮めたソロモンは神の前に高慢になり、多くの外国の妻とそばめを迎え、彼女たちがソロモンを偶像礼拝へと向かわせました。その結果、神は王国を引き裂くと語られ、ソロモンの死後、そのとおりになりました。

③王国分裂　１４：９，１０　Ｉヨハネ５：２１

ソロモン時代に強制労働と重税に苦しんだ民は、レハブアムが王になった時、労働と税を軽くしてほしいと頼みました。しかし、王は民の声を聞き入れなかったので、北の１０部族はヤロブアムを王とし、北イスラエル王国を造りました。一方、ユダ族は引き続きレハブアムを王とし南ユダ王国を造り、こうしてイスラエルは南北に分裂しました。ヤロブアムは金の子牛を造り、民を偶像礼拝へと導きました。これが、北王国の堕落と滅亡の原因となりました。

④エリヤの活躍　１８：３７～３９　ヤコブ５：１６～１８

北イスラエル王国の１９人の王は、みなヤロブアムの罪を犯し続けました。その中でもアハブはイゼベルと結婚し、バアル礼拝を大々的に取り入れ、主の預言者を迫害しました。そのような中で、エリヤは主のことばをアハブに語り、バアルの預言者と対決し、主こそまことの神であることを証ししました。

Ⅱ列王記

１．書名

歴史書の第７番目はⅡ列王記です。列王記はヘブル語聖書では 1 冊の書物でしたが、サムエル記同様、旧約聖書がギリシャ語に訳されたときに２巻に分けられました。列王記はソロモンの治世から分裂王国時代の歴史を記しています。この間北イスラエル王国では１９人の王、南ユダ王国では２０人の王によって治められたので、この書は列王記と名付けられました。

２．著者と成立過程

列王記は、ＢＣ９６０～５６０年頃までの４００年間の歴史を取り扱っています。その間にソロモンと南王国の２０人の王（BC931～586 年）、北王国の１９人の王（BC931～721 年）の治世が記されています。Ⅱ列王記は分裂王国時代後半の約２８０年の歴史と南北王国の滅亡までを記しています。列王記の著者は不明ですが、預言者たちが書いた資料を用いて、BC５５０ 年頃一つの書物としてまとめたと考えられます。

３．内容とメッセージ

本書は大きく３つに区分することができます。1）１～１０章　エリシャの時代　2）１１～１７章　分裂王国の後期　3）１８～２５章　南ユダの後期

①エリシャの活躍　５：１４　ルカ４：２７

エリヤの後継者となったエリシャは、北イスラエルで預言者の働きを行います。彼はエリヤ同様、様々な奇跡をもって主こそ真の神であることをイスラエルに知らせます。ナアマン将軍のいやしの奇跡は、主イエスが異邦人に対する救いの例として語られました。神は旧約時代にも、異邦人であっても信仰を持つ者を救ってくださったのです。

②北イスラエル王国の滅亡　１８：１１，１２　ローマ１１：２２

北イスラエル王国の１９人の王は皆、最初の王ヤロブアムがベテルとダンに置いた金の子牛に仕え、主に対して罪を犯し続けました。そして、国民も偶像礼拝を行い続けました。この結果、神は北イスラエルをさばき、ＢＣ７２１年にアッシリヤによって北イスラエルは滅ぼされました。そして、国民は捕囚の民となってアッシリヤに連れて行かれ、サマリヤに残された民もアッシリヤによって混血民族とされました。

③ヒゼキヤ王の改革　１８：１－５　ローマ１０：１１

南ユダ王国では２０人の王のうち８人は主を信じました。なかでも、北イスラエルの滅亡を目の当たりにした南ユダのヒゼキヤ王は、主に信頼し、宗教改革を行いました。そして、偶像を取り除き、主の宮を清めました。彼は、父アハズ王とは違い、預言者イザヤに信頼しました。神はヒゼキヤの祈りを聞き、アッシリヤから南ユダを守られました。

④南ユダ王国の滅亡　２４：２０　ローマ１５：１２

南ユダではヒゼキヤの後、ヨシヤも再び宗教改革を行いますが、偶像礼拝はなくなりませんでした。神はついに、主に従わない南ユダをさばき、ＢＣ５８６年にバビロンによって南ユダも滅び、国民はバビロンに捕囚の民となって連れて行かれました。しかし、北イスラエルとは違い、７０年後ユダの民は解放され、エルサレムは再建されます。そして、ダビデの家は存続し、やがて、救い主誕生の預言が成就していきます。

Ⅰ 歴代誌

１．書名

歴史書の第８番目はⅠ歴代誌です。歴代誌もサムエル記や列王記と同様、ヘブル語聖書では１冊の書物でしたが、旧約聖書がギリシャ語に訳されたときに２巻に分けられました。この書は、イスラエルの歴代の王の歴史を記しているので、歴代誌と名付けられました。ギリシャ語訳では「省略されてきた記録」という書名が付けられました。それは歴代誌がサムエル記、列王記と同じ時代を取り扱いながら、それらには書かれていない多くの事柄を記しているからです。

２．著者と成立過程

歴代誌には著者が誰であるかは記されていません。ユダヤ人の伝承によれば、著者はエズラと言われています。それは、歴代誌の終りとエズラ記の初めの文章が一致すること、またエズラ記と同一シリーズとして取り扱われてきたからです。著者はＢＣ４４０年ごろに、多くの預言者や王たちの書、さらに、すでに成立していた聖書を用いて、エルサレムに帰還した民に対してこの書を書き記しました。

３．内容とメッセージ

本書は大きく２つに区分することができます。1）１～９章　イスラエルの系図　2）１０～２９章　神殿建築準備者ダビデ

①イスラエルの系図　９：１、ルカ３：２３

歴代誌は、最初にアダムから始まるイスラエルの系図を記しています。エルサレムに帰還した民にとって、自分が神の民の一員であるか否かは非常に重要なことであり、系図はそのことを証明するものでした。新約時代においては、イスラエルの系図は、イエス・キリストに繋がることによって完成します。私たちは人種に関わらず、罪を悔いあらため、イエスを信じることによって、神の民の一員となることができます。

②神の箱の移動　１５：１３－１５　ヤコブ１：２２

ダビデは全イスラエルの王となった時、都エルサレムに神の箱を迎え入れたいと願いました。しかし、最初の移動では、不敬虔な罪のために神の箱を運び入れることができませんでした。ダビデは、みことばに従わなかったことに失敗の原因があることを悟り、２回目はみことばに従ってレビ人に運ばせ、ついに神の箱をエルサレムに迎え入れることができました。みことばに従い、実行することが最も大切なことです。

③神殿建築の準備　２２：５　マタイ３：１－３

ダビデは、神の箱のために神殿を建てる志を持ちましたが、神はダビデが建てることを許されず、息子ソロモンが建てると告げられました。そこで、ダビデは神殿建築のために多くの資材を用意し、また神殿で仕えるレビ人の奉仕の組み分けをして準備をしました。バプテスマのヨハネはイエスのための準備をしましたが、私たちの奉仕のにも、次の世代が主に仕えるために準備をするという視点を持つことは大切です。

④ダビデの信仰　２９：１８，１９　ヘブル１１：３２－３４

ダビデは神殿建築の働きをソロモンに託し、民とソロモンのために神に祈りました。ダビデは決して完全な人ではなく罪も犯しましたが、神の前に悔い改め、最後まで主に信頼し従い通しました。その結果、ダビデはその後の王たちの信仰の模範となりました。信仰によって歩む者の幸いを、ダビデの生涯は私たちに教えています。

Ⅱ歴代誌

１．書名

歴史書の第９番目はⅡ歴代誌です。歴代誌もサムエル記や列王記と同様、ヘブル語聖書では１冊の書物でしたが、旧約聖書がギリシャ語に訳されたときに２巻に分けられました。この書は、イスラエルの歴代の王の歴史を記しているので、歴代誌と名付けられました。ギリシャ語訳では「省略されてきた記録」という書名が付けられました。それは歴代誌がサムエル記、列王記と同じ時代を取り扱いながら、それらには書かれていない多くの事柄を記しているからです。

２．著者と成立過程

歴代誌には著者が誰であるかは記されていません。ユダヤ人の伝承によれば、著者はエズラと言われています。それは、歴代誌の終りとエズラ記の初めの文章が一致すること、またエズラ記と同一シリーズとして取り扱われてきたからです。著者はＢＣ４４０年頃、多くの預言者や王たちの書、さらに、すでに成立していた聖書を用いて、エルサレムに帰還した民に励ましと警告を与えるために、この書を書き記しました。

３．内容とメッセージ

本書は大きく２つに区分することができます。１）１～９章　神殿建築者ソロモン　２）１０～３６章　南ユダ王国の王たち

①ソロモンの神殿建築　７：１－３、ヨハネ４：２３，２４

Ⅱ歴代誌は、ソロモンの神殿建築を中心に彼の生涯を描いています。それは、バビロンから帰還したユダヤ人を神殿礼拝に立ち返らせる目的があったからです。ソロモンは、ダビデから引き継いだ神殿建築の使命を忠実に果たし、神殿は完成し、神殿には神の栄光が満ちました。帰還した民も、ゼルバベルによって再建された神殿で神を礼拝することによって、神の祝福を受けることができました。

②マナセの罪と悔い改め　３３：１０－１３、Ⅱペテロ３：９

ヒゼキヤが宗教改革を行い、アッシリヤから南ユダを救った後、息子マナセが王となりました。マナセは、偶像礼拝を行い、神殿を汚し、悪に悪を重ねました。その結果、マナセはアッシリヤ軍によって捕えられ、バビロンへ連れて行かれました。しかし、その時マナセは、神の前にへりくだって悔い改めました。神はマナセの祈りを聞き、彼をエルサレムに連れ戻されました。神は悔い改める者にはあわれみ深いお方です。

③バビロン捕囚　３６：１９，２０、ガラテヤ６：７

神は何度も預言者を遣わして、南ユダに神に立ち返るようにと語られました。しかし、王も民も神のことばに聞き従わず、不信の罪を重ねました。その結果、神のさばきが下り、カルデヤ人によってエルサレムは破壊され、神殿は焼かれ、南ユダ王国はＢＣ７２１年に滅びました。そして、剣をのがれた民は、バビロンに連れて行かれました。こうして、主をさげすむ者は軽んじられるとのみことばが現実となりました。

④クロス王の帰還命令　３６：２２，２３、黙示２：４，５

バビロニアを滅ぼしたペルシャの王クロスは、捕囚の民にエルサレムに帰るように命じました。その時、ユダヤ人はどんなに喜び、神の約束が真実であることを覚えたことでしょう。帰還を果たした民は、なお困難な中にありましたが、神の救いの喜びの原点に立ち返るなら、神に信頼して歩み続けることができるのです。

エズラ記

１．書名

歴史書の第１０番目はエズラ記です。祭司であり学者であるエズラは、この書における中心人物なので、本書はエズラ記と名付けられました。バビロン捕囚からの帰還は全部で３回あり、第１回はＢＣ538 年にゼルバベルの指導の下で、第２回はＢＣ458 年にエズラの指導の下で、第３回はＢＣ445 年にネヘミヤの指導の下で行われました。エズラの帰還はゼルバベルによる神殿完成の 58 年後であり、エズラは再び堕落の道を歩んでいた帰還民に対して悔い改めを迫り、信仰の改革を行いました。

２．著者と成立過程

エズラ記には著者の名前は記されていませんが、7～9 章にエズラ自身を示す「私」という言葉が使われているところから、伝統的にエズラが書いたと考えられています。エズラはＢＣ440 年頃に、第 1 回の捕囚からの帰還と神殿再建の記録をまとめ、さらに自らの帰還と信仰の改革を書き記したと考えられます。

３．内容とメッセージ

本書は大きく２つに区分することができます。１）１～６章　第 1 回帰還と神殿再建
２）７～１０章　第２回帰還とエズラの活動

①エルサレム帰還　２：１，２　詩１２６：１－３

南ユダを滅ぼしたバビロニアは７０年間世界を治めた後、ペルシャの王クロスによって滅ぼされました。クロス王は、ＢＣ539 年にユダヤ人に対しエルサレムへの帰還を許可し、こうしてエレミヤの預言は成就しました。第 1 回の帰還はＢＣ538 年にゼルバベルの下で行われ、約 5 万人の民がエルサレムに帰ってきました。彼らの多くはバビロンで生まれた世代でしたが、祖国と神殿の再建を願って、帰還しました。

②神殿の再建、中断、完成　６：１４－１６　詩３７：５

帰還した民は喜びに満ちて、神殿再建工事を開始しました。ところが、工事を開始すると、サマリヤ人の妨害が始まり、ついには王に訴えられて、工事は 18 年間中断してしまいました。しかし、預言者ハガイとゼカリヤに励まされた民は工事を再開し、ダリヨス王の保護も受けることができ、ＢＣ515 年ついに神殿は完成しました。

③エズラの帰還　７：８－１０　使徒２０：３１，３２

神殿完成から 58 年後、エズラの指導の下、第 2 回の帰還が行われ、約 1500 名の男子とその家族及びレビ人たちが帰ってきました。エズラは主の律法を教え、イスラエルの信仰の再建をするために帰還しました。ところが帰ってみると、先に帰還した民は予想以上に堕落し、多くの民と指導者が異邦人と結婚し、神殿礼拝はおろそかにされていました。エズラは、民の罪を告白して涙ながらにとりなし祈りました。

④罪の悔い改め　１０：１０－１２　Ｉヨハネ１：９

エズラが悔い改めの祈りをした時、同じ思いを持つ多くの民がエズラの下に集まってきました。そして、外国人妻を追放し、罪を悔い改めて、信仰の再建をはかろうと申し出ました。異邦人との結婚は、偶像礼拝とそれに伴う悪を持ち込むことになります。イスラエルが再び神のさばきを受けて滅びることがないようするためには、徹底した悔い改めが必要でした。エズラは立ち上がり、外国人妻を追放する改革を行いました。

ネヘミヤ記

１．書名

歴史書の第１１番目はネヘミヤ記です。エズラ記とネヘミヤ記は同時代の出来事を記しているので、ヘブル語聖書では１つの書物として取り扱われた時代もありましたが、その後は別々の書物とされて今日に至っています。本書は著者ネヘミヤの名前が書名とされました。ネヘミヤはペルシャのアルタシャスタ王の献酌官でしたが、エズラの帰還の１３年後にエルサレムに帰還して、城壁を再建しました。

２．著者と成立過程

１：１に「ハカルヤの子ネヘミヤのことば」とあり、さらにネヘミヤ自身が「私」と書いている箇所が多くあるので、本書の著者はネヘミヤです。ネヘミヤはエルサレムに帰り、エルサレムの総督となって城壁再建と宗教改革を行いました。その後、一度ペルシャに戻りましたが、再びエルサレムに帰り、民を導きました。本書は、ネヘミヤの２回目のエルサレム帰還の後、ＢＣ４３０年頃に書かれたと考えられています。

３．内容とメッセージ

本書は大きく２つに区分することができます。１）１～６章　第３回帰還と城壁再建
２）７～１３章　エズラとネヘミヤの宗教改革

①ネヘミヤの祈り　１：１１、Ｉテサロニケ５：１６－１８

ネヘミヤは、ユダから来た人々からエルサレムの困難な状況を聞いた時、神の前に断食して祈りました。ネヘミヤのエルサレムにおける働きはこの祈りから始まり、祈りながら進められていきました。神はネヘミヤの祈りを聞き、王の心を動かして、城壁再建の許可を与え、ネヘミヤをエルサレムに遣わしました。

②城壁再建工事と妨害　２：１８－２０、ヨハネ１６：３３

エルサレムに帰還したネヘミヤは、民を励まし、城壁再建工事に取り掛かりました。ネヘミヤは神が工事を成功させてくださることを確信していましたが、周辺の民族からの妨害や陰謀、さらにはユダヤ人の内側の問題などが次々と起こってきました。しかし、主に信頼し、一つ一つの問題を祈りつつ対処し、作業を分担して工事を進行させました。

③城壁完成　６：１５，１６　ピリピ２：１３

ネヘミヤは工事にあたる民の安全を守り、経済的必要にも配慮して、民が一致して働けるようにした結果、様々な問題を乗り越えて、５２日間という短期間で工事は完成しました。これは神が成し遂げてくださった神のわざであり、妨害をした周りの民も神のわざだと認めざるをえませんでした。城壁再建は神のみわざを証しする事業となったのです。

④宗教改革　８：８，９　使徒２：３７，３８

城壁完成後、民は集まり、エズラと彼の弟子たちが民に律法を読んで説明しました。その時、民は律法を理解し、みことばが心に迫り、涙を流しました。その後、きよめの集会が行われ、律法の朗読と罪の悔い改めを行い、主を礼拝しました。そして、民は律法に従って生きる盟約を結び、信仰が整えられた後に、城壁の奉献式を行いました。

エステル記

１．書名

歴史書の第１２番目はエステル記です。本書は、主人公エステルの名前が書名となりました。エステルはペルシャのシュシャンに住むユダヤ人であり、両親と死別後、モルデカイに育てられました。アハシュエロス王（クセルクセス）の王妃ワシュティの失脚後、エステルが王妃となりました。エステルは、ハマンによるユダヤ人抹殺計画からユダヤ人を救うために、神に用いられました。

２．著者と成立過程

著者は不明ですが、アハシュエロス王の死後（ＢＣ４６５年）、ペルシャに住むユダヤ人によって書かれたと考えられます。王の側近となったハマンはユダヤ人抹殺計画を立て、その実行時期をくじ（プル）を投げて決めました。しかし、エステルの活躍によってハマンは失脚し、ユダヤ人が勝利しました。この勝利を記念してプリムの祭りを定めました。本書はそのプリムの祭りの起源を伝えるために書かれました。

３．内容とメッセージ

本書は大きく２つに区分することができます。１）１～５章　ユダヤ人の危機　２）６～１０章　ユダヤ人の勝利

①ユダヤ人虐殺計画　３：５－７、ヨハネ１７：１５

王の側近となったハマンは、自分にひれ伏さないモルデカイに腹を立て、モルデカイだけでなく、モルデカイの民族ユダヤ人を抹殺する計画を立てました。実行日はくじ（プル）によって約１年後のアダルの月（太陽暦の２～３月）に当たりました。王はハマンの計画に許可を与え、この計画がペルシャ全土に伝えられると、ユダヤ人に大きな嘆きが起こりました。

②神の摂理　４：１２－１４、箴言８：１４、１５

この危機の中で、モルデカイはエステルに対して、王の所に行って、自分の民族の救いを願うようにと伝えました。エステルが躊躇すると、モルデカイはあなたが王妃となったのは、もしかするとこの時のためかもしれないと、神の摂理を覚えるようにと伝えました。エステル記は神の名が記されていない唯一の書物ですが、神は歴史の背後で、ご自分の計画を成し遂げるために、摂理をもって働いておられます。

③信仰の応答　４：１５－１７、マタイ１６：２４

モルデカイの言葉を聞いたエステルは、ユダヤ人の救いのためにいのちを賭けて立ち上がる決心をしました。そして、３日間の断食による祈りを要請し、自らも祈って王のもとに行きました。王はエステルに好意を示し、エステルの願いどおり、ハマンと共に彼女の主催する宴会に行くことになりました。神の摂理は、人間の信仰の応答によって、実現していきました。

④プリムの祭り　９：２１，２２、ルカ１９：９，１０

エステルは王に、２日目の宴会の席で、自分の願いを王に伝えると言いました。その後、神の摂理の中で、ハマンはモルデカイをはりつけるための柱を立て、王はモルデカイに栄誉を与えることを眠れない夜に決めました。そして、翌日ハマンは自分で立てた柱にかけられ、モルデカイは王の側近となり、ユダヤ人は抹殺計画から救われ、勝利しました。神によって、悲しみが喜びに、喪の日が祝日に変えられました。

ヨブ記

１．書名

詩歌の第１番目はヨブ記です。本書は主人公ヨブの名前が書名とされました。ヨブはウツの地に住み、潔白で正しく、神を恐れる人でした。多くの者は、ヨブの生活様式から考えると、ヨブは族長時代の人物だと考えています。ヨブは、突然の大きな試練に会って苦しみます。ヨブ記は、ヨブの苦しみを通して、神を信じる者の苦しみについて深く教えています。

２．著者と成立過程

ヨブ記には、著者や著作年代について何も記されていません。多くの者は、族長時代のヨブの出来事が文書や口伝によって受け継がれ、ソロモン時代にまとめられたのではないかと考えています。著者は、正しい者の苦しみというテーマをヨブの人生から書き記しました。そして、苦しみの解決は、その原因を知ることによってではなく、神の語りかけを聞き、すべてを支配しておられる神に信頼することによって与えられると教えました。

３．内容とメッセージ

ヨブ記は、序論―ヨブの苦しみの始まり(1, ２章)、本論―ヨブと友人の論争と神の語りかけ(3:1～42:6)、結論―ヨブの後半の人生の祝福(42:7～17)の３つに分けることができます。

①ヨブの苦しみのきっかけ　１：８，９　マタイ４：１１

ヨブの正しさを語る主に対して、サタンはヨブの信仰はご利益信仰であり、ヨブはこの世の祝福を失えば神をのろうと主に訴えました。サタンの主張が間違っていることを証明するために、神はサタンがヨブを打つことを許されました。この結果、ヨブの人生に苦しみがやってきました。サタンは、ヨブを試み、イエスさえも試みました。

②苦しみの中の賛美　１：２１，２２　Ⅱテモテ４：１８

サタンがヨブの財産や子供を打った時、ヨブは苦しみの中で神を礼拝し、賛美し、罪を犯しませんでした。また、ヨブが腫物で打たれた時も、神を信じ罪を犯しませんでした。ヨブの信仰はご利益信仰ではありませんでした。また、彼の告白は、私たちが苦しみの中にある時に、どのように神を信じ、賛美すればいいかを教えています。

③因果応報　４:７　ヨハネ９：２，３

ヨブの友人たちは、ヨブの苦しみの原因は彼や彼の子供たちの罪にあると考え、ヨブに罪を告白し悔い改めるようにと説き続けました。それに対し、ヨブは自分の潔白を主張し、正しい者がなぜ苦しまなければならないのかと悩み続けます。神はヨブの問いに最後まで答えられませんでしたが、ヨブが神のことばを聞いた時に、無条件に神に信頼し、悔い改めました。その結果、ヨブは２倍の祝福を神から受けたのでした。

④贖い主　１９：２５－２７　ヨハネ１：２９

ヨブは苦しみの中で、神についての真理をたびたび見出し告白しました。その中でも、贖い主に対する信仰は、すばらしい神への信仰告白となりました。どんな苦難の中にあっても、自分を贖う方は生きておられ、最後には贖い主が自分を贖ってくださり、すべての苦しみから解放され、救いは完成する。このヨブの贖い主への信仰は、私たちのイエス・キリストに対する信仰に通じるものです。

詩篇

１．書名

詩歌の第２番目は詩篇です。本書は１５０の詩文で書かれた賛美と信仰の証しの詩歌集なので詩篇と呼ばれています。詩篇は人間の神への応答の歌であると同時に、神の啓示の書であり、神の啓示を与える神のことばです。詩篇を黙想する時、私たちの心を神に向けることができ、みことばが自分の信仰告白となり、神がどのようなお方であるかを知ることができます。そして、神の力と導きをいただくことができます。

２．著者と成立過程

詩篇の３分の２は表題に著者名が記されており、３分の１は記されていません。７３の詩篇はダビデの作、１２がアサフ、１１がコラの子たち、さらにソロモン、モーセ、ヘマン、エタンの作の詩篇もあります。彼らは詩によって神を賛美し、信仰を告白し、信仰生活の中で神に応答しました。５巻に編集されている詩篇は、ＢＣ４００年頃までに現在の形にまとめられたと考えられています。

３．内容とメッセージ

詩篇は５巻に区分され、それぞれの巻の最後は頌栄で閉じています。全体の流れの中で１、２篇は序論、１４６～１５０篇の「ハレルヤ詩篇」が結語となっています。

①賛美の詩篇　１４６：１、２　マタイ２６：３０

詩篇の中心テーマは神への賛美です。創造者であり主権者である唯一のまことの神を信じる者として、心から神と神のみわざをほめたたえています。また、神のことばを信じる者として、みことばに生きる信仰生活の中で、神を賛美し、一切の栄光を神に帰しています。そして、読者に神を賛美することの幸いを教えています。

②信仰告白の詩篇　２３：１－３　ヨハネ１０：１１

詩篇は、神に信頼する者が、神への信仰告白を詩によって表している証しの歌です。その信仰告白は、みことばに信頼する者の信仰の証しであり、みことばの約束がその土台です。著者は、神への信頼、悔い改め、感謝、祈り、嘆きなどを神に向かって語り、神に心を向けます。読者はこれらのみことばに親しむ時、自分の信仰告白をして詩篇を口ずさみ、信仰の励ましをいただくことができます。

③メシヤ詩篇　２２：１　マタイ２７：４６

詩篇の中には救い主イエス・キリストの預言がなされている詩篇がいくつもあり、これらの詩篇は「メシヤ詩篇」と呼ばれています。新約聖書は詩篇から４００以上引用し、メシヤ詩篇からは１００以上引用しています。イエス・キリストは十字架の受難において詩篇のことばで祈られ、私たちに代わって神の怒りをその身に受けてくださいました。神は詩篇の中に、来るべき救い主を預言しておられたのです。

④ヘブル詩　１１９：１－３　エペソ５：１９

詩篇は様々なヘブル詩の形式や用法を用いながら、神への賛美や信仰告白を歌っています。例えば、１１９篇は、８節ずつの冒頭の言葉がヘブル語のアルファベット順に並べられた「いろは歌」となっています。また、並行法を用いて、同じ内容を別のことばで繰り返したり、内容を深めたりします。そのような形式を用いながら、神のことばに対する信仰が明確に語られ、みことばに従う者の幸いが歌われています。

箴言

１．書名

詩歌の第３番目は箴言です。本書は、神の民が律法に従ってどのように生きていけばいいかを、ことわざや格言によって教えている書物なので箴言と名付けられました。箴言は、詩篇と同様に詩文体で書かれ、多くの節は並行法を用いて書かれています。１つの教えを２行よりなる対句で記しているので、暗記しやすく、人々が毎日の生活の中でこの教えに従うことを願って書かれています。

２．著者と成立過程

箴言の主な著者はソロモンです。(1:1,10:1,25:1)さらに知恵のある者(22:17,24:23)、アグル(30:1)、レムエル(31:1)が著者として記されています。ソロモンは知恵に満ち、三千の箴言を語りましたが、その一部が箴言に記録されています。(Ⅰ列王 4:32)箴言は、ヒゼキヤ王の時代に編集され、最終的には捕囚後に完成したと考えられています。

３．内容とメッセージ

箴言は著者ごとにまとめられています。ソロモンの箴言(1～９,10～22,25～29 章)、知恵ある者のことば(22～24 章)、アグルのことば(30 章)、レムエルのことば(31 章)

①知識の初め　１：７　コロサイ３：１０

１：７は箴言全体を貫く指針です。主を信じ、かしこみ恐れることは人間の正しい知識の出発点であり中心です。真の知識は、神との正しい関係から始まります。主を恐れる知識を持つ人は、神を中心にすべてのことを正しく位置づけることができます。反対に、主を恐れない人は神の知恵と訓戒をさげすみ、自分の知恵に頼って生きようとします。そのような人は愚か者であると箴言は教えています。

②主への信頼　３：５，６　マタイ６：３３

主を恐れる知識は、主に信頼する生き方へと私たちを導きます。自分の悟りに頼らず、心の底から主に拠り頼む生き方こそ、知恵ある人の生き方です。その人はどこにあっても主を認め、主はその人の道を神のみこころにかなったまっすぐな道へと導かれます。主に信頼し、主を第一とする時、主はすべてを備えてくださるのです。

③高慢と謙遜　１８：１２　Ⅰペテロ５：５

高慢は、知識の大原則である主を恐れることに反し、主の戒めに聞こうとしません。そのような高慢は、人を破滅に導きます。一方、謙遜は主の前に自らをへりくだらせ、主を恐れ、主の戒めに聞き従う者とします。神はそのような人を祝福し、ご自身の栄誉を与えられます。神の前にへりくだればへりくだるほど、神の恵みをあふれるばかりいただくことができるのです。

④しっかりした妻　３１：３０　Ⅰペテロ３：３，４

箴言の最後に、「しっかりした妻」の「いろは歌」が記されています。彼女の日常生活に表わされる忠実、勤勉、親切、世話、知恵、威厳、気品などの特質は、すべて主を恐れることを土台としています。外面的な美しさからはこれらの優れた特質は出てきません。主を恐れる知識は、しっかりした優れた品性を私たちに与え、私たちの生活を良きもので満たしてくれます。

伝道者の書

１．書名

詩歌の第４番目は伝道者の書です。この書は、１：１で「エルサレムでの王、ダビデの子、伝道者のことば」と記されていますので、伝道者の書と名付けられました。伝道者（ヘブル語ではコヘレト）とは、集会を招集して開催し説教する人を意味する言葉です。新共同訳ではコヘレトを書名としています。

２．著者と成立過程

著者の伝道者は本名を明かしていません。伝道者がエルサレムの王、ダビデの子であり、知恵、富、事業において比類のない者であることを考えると、著者はソロモンであると伝統的に考えられています。伝道者は自分の人生を振り返りながら、神に信頼して生きることこそ、人生のむなしさから解放され、真に意味のある人生を歩む鍵であると教えました。

３．内容とメッセージ

本書は人生のむなしさと神に信頼する生き方の確かさを交互に語りながら、１２：３の「神を恐れよ」との結論に導きます。

①人生のむなしさ　１：２，１３，１４　ローマ１：２１

伝道者が語る人生のむなしさの第１は、神を信じずに生きることのむなしさです。人は神から離れていては、何をしても心がむなしいのです。第２は、神を信じる者が、神の計画のすべてを知らなければむなしいと考えるならば、そのような人生はむなしいということです。クリスチャンの人生にも、なぜ、どうしてという問いに満ちています。その問いに対して、どう向き合っていけばよいかを、伝道者は自らの経験を通して教えています。

②むなしさからの解放　５：１８－２０　ローマ８：２８

伝道者は、たとえこの世の出来事の意味をすべて理解できなくても、すべてが神の計画の中にあると信じるなら、むなしさから解放されると教えます(8:17)。神の計画は最善であると信じ、神に信頼して生きるならば、日常生活の中で神がくださっている幸せを見つけ、くよくよせず、喜んで生きることができるのです。

③若者への忠告　１２：１　マタイ１９：２１，２２

伝道者は、死と神のさばきはすべての人に訪れるので、若者は神の前に自分の人生をよく考えるようにと教えます。そして、若い時に自分の体と心を大切にし、罪から離れ、創造者なる神を信じて生きるようにと勧めます。そうするならば、生涯幸いな人生を歩み続けることができ、神に会う備えをすることができるのです。

④伝道者の結論　１２：１３　ヘブル１２：２

伝道者は、自らの人生の探求の中で、人はいかに生きるべきかの結論を見出しました。その結論が「神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。」です。人間にとって、すべてを計画をもって治め、最善に導かれる神に信頼することがなによりも大切です。神に信頼し、神の恵みに感謝し、みことばに従って生きるときに、神の栄光を現す幸いな人生を見出すことができるのです。

雅歌

１．書名

詩歌の第５番目は雅歌です。ヘブル語聖書の書名は「歌の中の歌」、「最も優れた歌」の意味があります。日本語聖書は、漢訳聖書にならって「雅歌」と名付けられました。英語聖書ではソング・オブ・ソングズ（歌の中の歌）又はソング・オブ・ソロモン（ソロモンの歌）となっています。

２．著者と成立過程

１：１に「ソロモンの雅歌」と記されていますので、伝統的にソロモンが著者であると考えられています。王宮のぜいたくな装い、広範囲なイスラエルの地名の言及などはソロモン時代の社会的背景が反映していると考えることができます。ソロモンはＢＣ９７１～９３１まで王として支配しましたが、その間に書き記したと考えられます。

３．内容とメッセージ

雅歌は男女の愛の歌であり、神の名が用いられず、信仰的な内容もほとんどないため、様々な解釈が試みられてきました。１）比喩的解釈：神とイスラエルの関係に当てはめる解釈、キリストと教会の関係に当てはめる解釈　２）劇詩説：雅歌を劇詩の脚本とみなして解釈、2 人説（ソロモンとシュラムの娘）と 3 人説（ソロモン、シュラムの娘、娘の真の恋人である羊飼いの若者）がある。３）純愛詩説：雅歌を歴史的な出来事と認め、神が与えた正しい結婚関係の愛を語る詩歌として文字通り解釈する。

①花嫁と花婿の対話　１：１５－１７　創世２：２２－２５

神は人を男と女に造られ、結婚を制定されました。男女は結婚を通して神によって夫婦として結ばれ、二人は一体とされます。神が意図された夫婦の愛は、親しく、美しく、神聖で、純粋な愛であることを本書は教えています。夫婦は対話を通して、互いの愛をはぐくむことの大切さを教えられます。

②内から目ざめる愛　２：７　エペソ５：２２－２４

２：７は３：５，８：４にも出てくる文章を区切る言葉です。愛とは自発的なものであり、外側からかき立てられたり、強制されたりするものではありません。むしろ、一人一人の自由意思に基づき、心の内側から湧き上がってくるものです。夫婦は互いに心から愛し合う者となるために、お互いをいつくしみ大切にすることが必要です。

③婚礼の行列　３：９－１１　エペソ５：２５－２８

婚礼の日は心の喜びの日です。花嫁も花婿もその日を待ち望み、その日のために準備します。そして、婚礼の日を迎えるとき、２人は神によって一体とされることを心から喜び感謝します。夫婦はその日を忘れることなく、互いの愛を成長させていくことが大切です。キリストの花嫁である教会も、やがて天にあって花婿キリストと一つとされることを心から待ち望んでいます。

④愛の炎　８：６，７　エペソ５：２９－３３

神の意図された結婚における夫婦愛は、強く激しく消えることのない炎のようなものです。しかし、現実は弱くもろく消えやすいものとなってしまっています。炎のような強い愛は、神の愛であり、キリストの教会に対する愛です。結婚はキリストと教会の関係を表しているゆえに、夫婦はキリストを見上げ、神の愛をいただいて互いに愛し合うことが大切です。

イザヤ書

１．書名

イザヤからマラキまでの 17 書は預言書です。さらに、イザヤからダニエルまでの 5 書は大預言書、ホセアからマラキまでの 12 書は小預言書と呼ばれます。本書は 1:1 に「アモツの子、イザヤの幻」とあるように、イザヤに啓示された預言書なので「イザヤ書」と名付けられました。イザヤはウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの 4 人の王の時代に、50 年以上預言者として活躍しました。イザヤ書は救い主の預言に満ちているため、旧約の福音書とも呼ばれています。

２．著者と成立過程

伝統的に 1:1 の表示をイザヤ書全体への言及と理解し、著者はイザヤ 1 人と考えます。新約聖書の証言もこれと一致します。(マタイ 3:3，8:17)一方、聖書の啓示の超自然性を否定するリベラル神学においては、40 章以降の預言が極めて正確なバビロン捕囚期の歴史的出来事を含むため、イザヤの預言とは認めません。そこで、1～39 章(第 1 イザヤと呼ぶ)のみをイザヤの著書とし、40～55 章(第 2 イザヤ)と 56～66 章(第 3 イザヤ)は、後代の 2 人の著者がすでに起こった出来事を預言風に書いたと考えます。

３．内容とメッセージ

イザヤ書は聖書 66 巻の構造と類似しています。前半の 39 章は旧約の 39 巻に対応する律法の書であり、後半の 27 章は新約の 27 巻に対応する福音の書ということができます。イザヤ書は旧約の中で最も多く新約に引用されており、旧約聖書の中で最も偉大な書物だと言われています。

①ガリラヤの光栄　９：１、２　マタイ４：１２－１７

イザヤ書はメシヤ預言に満ちています。ガリラヤの光栄は、ガリラヤで働きを始められる世の光なる救い主です。救い主はまことの人であり、ダビデの子孫として生まれます。また、救い主はまことの神でもあり、この世を治める主権を持っておられます。この救い主の預言はイエスによって成就しました。

②みことばの実現　６１：１、２　ルカ４：１６－２１

イエスはイザヤ書 61:1、2 をナザレの会堂で朗読された後、「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおり実現しました。」と言われました。イエスこそイザヤが預言したまことの救い主です。イエスは、私たちの罪を赦し、霊の目を開け、真の自由を与え、主の恵みに生きるために、救いを成し遂げられました。

③苦難のしもべ　５３：５，６　Ｉペテロ２：２２－２５

イザヤは、救い主は苦難のしもべとして、私たちの罪を負い、神のさばきを受けて死に、その死によって人類の罪の贖いを成し遂げてくださると預言しました。そのとおりに、イエスは十字架の上で私たちの罪をその身に負い、私たちの身代わりに神のさばきを受け、その死によって罪を贖ってくださいました。

④捕囚からの解放　４４：２８　エズラ１：１，２

イザヤの預言は、ユダの滅亡、捕囚からの解放、キリストの来臨、新天新地にまで至ります。それらの預言が自由自在に行き来します。バビロン捕囚からの解放の預言は、ペルシャ王クロスの名前まで正確に預言され、そのとおりに成就しました。神は歴史の支配者であられ、聖書の預言はこれからも確実に成就します。

エレミヤ書

１．書名

預言書の第２番目はエレミヤ書です。本書は１：１に「ヒルキヤの子エレミヤのことば」と記されているように、神がエレミヤに啓示された預言の書なので、エレミヤ書と名付けられました。エレミヤはヨシヤ、エホアハズ、エホヤキム、エホヤキン、ゼデキヤの５人の王の時代に預言し、エルサレム陥落を経験しました。その後、エレミヤはエジプトに連れて行かれますが、預言活動を続け、エジプトで亡くなったと考えられています。

２．著者と成立過程

本書の著者は、伝統的にエレミヤと考えられています。エレミヤは 36 章で、23 年間の預言のことばを書記バルクに記録させました。しかし、エホヤキム王はその巻物を焼いてしまいました。そこで、再びエレミヤは書記バルクに預言のことばを記録させました。その巻物に後半のことばを記録して、エレミヤ書が完成したと考えられます。

３．内容とメッセージ

エレミヤ書は大きく 4 つに分けることができます。1)エレミヤの召命(1 章)　2)ユダに対する審判の預言(2～25 章)　3)エレミヤの後半生の事件(26～45 章)　4)諸国民への預言(46～52 章)

①エレミヤの召命　１：４～８　ヨハネ１５：１６

エレミヤはヨシヤ王の 13 年目に、神から預言者としての召命を受けました。エレミヤへの神の選びは、母の胎に宿る前から神の計画の中で定まっていました。エレミヤは神の召命に応答し、南ユダの滅亡に至る歴史の中で、神のことばを語り続けました。その結果、同胞から激しい迫害を受けましたが、預言者の使命を最後まで全うしました。エレミヤは苦難を耐え、同胞のために涙した、涙の預言者と呼ばれています。

②ユダの滅亡、捕囚、帰還の預言　２５：８～１２　エズラ１：１，２

エレミヤは罪を悔い改めない南ユダに対し、バビロンによって滅ぼされ、捕囚の民になること、さらに、70 年の捕囚後、エルサレムに帰還できると預言しました。しかし、王も民もエレミヤのことばに聞かず、むしろ偽預言者のことばを信じ、エレミヤを迫害し、殺そうとしました。しかし、神はエレミヤを助け守られました。そして、エレミヤの預言はすべて成就しました。

③永遠の愛　３１：２～４　ヨハネ３：１６

神はユダに厳しいさばきを与えられましたが、それはバビロン捕囚を通して、剣を免れた残りの民が悔い改めて、神の救いの計画がその民を通して実現するためでした。神の永遠の愛は、イスラエルに、そしてすべての民に変わらず注がれ、その神の愛は、ユダの子孫、ダビデの子孫であるイエス･キリストを通して完全に現わされました。主イエスへの信仰によって、永遠の愛を私たちも心にいただくことができます。

④新しい契約　３１：３１～３４　ルカ２２：２０

エレミヤは、神の救いの計画は、新しい契約によって成就すると預言しました。新しい契約は、民の心の中に律法が書き記され、民は神の民とされ、神は民のすべての罪を赦すという契約です。この新しい契約が成就するために、イエスはご自分のいのちを十字架でささげ、私たちの罪の贖いを成し遂げられました。イエスを主と信じるときに、私たちは新しい契約の民とされ、エレミヤの預言は私たちのうちに成就します。

哀歌

１．書名

預言書の第３番目は哀歌です。本書は、ＢＣ５８６年にバビロンによって南ユダ王国が滅亡し、その民が捕囚となった悲惨な状況を悲しみ嘆く歌なので哀歌と呼ばれています。70 人訳では、本書の序文にエレミヤがエルサレムのために哀歌を作ったと記されているので、それ以降、エレミヤ哀歌と呼ばれるようになりました。しかし、今日では哀歌と呼ばれています。

２．著者と成立過程

本書は著者名を記していませんが、70 人訳の序文に従って、伝統的にエレミヤと考えられています。ユダの滅亡への嘆き、そこにある神のさばきと恵みの認識、悔い改めと神への祈りなどの本書の内容を考えると、著者がエレミヤである可能性は十分あります。その一方で、エレミヤと同時代の人物が書いた可能性もあります。いずれにしても、エルサレム崩壊後間もなく、ユダにおいて書かれたと考えられます。

３．内容とメッセージ

本書はヘブル語のアルファベット順に歌われる、いろは歌形式で書かれています。

1 章：荒廃したエルサレムへの嘆き、２章：神のさばき、３章：さばきの中にある神の恵み、４章：指導者たちの罪、５章：神に立ち返る祈り

①エルサレムへの嘆き　１：１－３　マタイ２３：３７，３８

神の都であるエルサレムは、バビロン軍によって陥落し、破壊されてしまいました。著者はエルサレムを女性にたとえ、エルサレムの悲しみを歌います。そして、以前は大いなる者、女王であったのに、今は荒廃し、かつての同盟国からも見捨てられ、民は捕囚となって異邦人の中で憩うこともできなくなってしまった姿を嘆いています。

②神のさばきと悔い改め　２：１７－１９　Ⅱコリント７：１０

著者は、エルサレム陥落が、民の罪に対する神のさばきであることを語ります。そして、だからこそ、神の前に悔い改めるべきことを民に命じています。悔い改めこそ、神が願っておられることであり、真実な悔い改めのみが、神との関係を回復させる道だからです。

③主の恵みとあわれみ　３：２２－２４　エペソ２：４－６

神はエルサレムをさばかれましたが、滅ぼし尽くすことはされませんでした。多くの民は剣を免れ、バビロンで捕囚となって生きることができました。これは神の恵みとあわれみによるものであり、民の側に何かの理由があったのではありません。神の恵みこそ罪人が救われるための唯一の理由です。

④神に立ち返る祈り　５：１９－２２　使徒３：１８，１９

エルサレムの神殿は破壊されても、天にある神の御座は永遠に続きます。著者は、神のみもとに私たちを帰らせてくださいと切に祈ります。神のみもとに帰るとは、神との関係の回復を意味します。それなしに、捕囚からの帰還はありません。神のさばきの現実の中で、神との関係の回復を得るために私たちがなすべきことは、悔いた心をもって神に切に祈ることです。

エゼキエル書

１．書名

預言書の第４番目はエゼキエル書です。本書はエゼキエルに啓示された神の預言の書なので、エゼキエル書と名付けられました。エゼキエルは、ＢＣ５９７年の第２回捕囚の際に、エホヤキン王と共にバビロンに捕え移されました。その５年目にバビロンで預言者としての召命を受け、バビロンで預言しました。そのメッセージは、エルサレムで預言したエレミヤと基本的に同じメッセージとなっています。

２．著者と成立過程

本書の著者はエゼキエルです。エゼキエルはバビロンの地で、エルサレム陥落と南ユダの滅亡を預言しました。エレミヤとエゼキエルの預言どおり、ＢＣ５８６年にバビロン軍によってエルサレムは陥落し、神殿は破壊され、南ユダは滅びました。バビロンに捕え移された捕囚の民は、絶望のどん底に落とされましたが、神はエゼキエルを通してイスラエル回復と将来の希望のメッセージを与えられました。

３．内容とメッセージ

本書は大きく３つに分けることができます。1）エルサレムに対する審判の預言（エルサレム包囲前）1－24 章　２）諸外国に対する審判の預言（エルサレム包囲中）25－32 章　３）イスラエルの回復と希望の預言（エルサレム陥落後）33－48 章

①エゼキエルの召命　３：１－３、詩篇１１９：１０３

エゼキエルはバビロンでの捕囚の 5 年目に、神から預言者としての召命を受けました。その時エゼキエルは、巻き物を食べよとの神の命令に従うことによって、神の召命に応えました。エゼキエルが神のことばである巻き物を食べると、蜜のように甘くなり、神のことばに養われて、預言者としての働きを始めました。エゼキエルは、彼が見た幻や彼が行った象徴的行為を通して、神のメッセージを伝えました。

②エルサレムを罰する者の幻　９：３－６、黙示９：４

8 章でエルサレムの神殿内での偶像礼拝の様子を幻で見たエゼキエルは、9 章でエルサレムを罰する者の幻を見ました。神は偶像礼拝をおこなっていない者の額にしるしを付けることを命じ、しるしのない者を殺すようにと命じました。エルサレムはこの幻のように、バビロン軍によって滅ぼされ、神のさばきが下されました。

③干からびた骨の谷の幻　３７：７－１２、使徒２：３８、３９

南ユダが滅びた時、捕囚の民は絶望し、エルサレム帰還は不可能なことだと思いました。これに対し、神は干からびた骨を生き返らせる幻をエゼキエルに見させ、神はイスラエルを回復させ、イスラエルの地に戻すことを約束されました。また、この幻は、救い主によって、新しい霊的イスラエルが起こされるという新約の時代をも預言しています。

④神殿から流れる川の幻　４７：８，９　ヨハネ７：３７－３９

神はエゼキエルに新しい神殿の幻を見させました。その神殿からは、いのちの水の川が流れ、この川が流れていく所では、すべてのものが生きました。この幻は、ご自身が神殿であるイエスによって成就しました。イエスが与える水とは聖霊であり、聖霊は人のたましいを生き返らせ、その人の心から生ける水が流れ出るようになります。そして、イエスから聖霊を受けた人々によって、福音は全世界に伝えられていきます。

ダニエル書

１．書名

預言書の第５番目で、大預言書の最後はダニエル書です。本書はダニエルに啓示された預言の書なので、ダニエル書と呼ばれています。ダニエルはＢＣ605 年の第１回捕囚の時に、バビロンに連れて来られました。ダニエルは、ＢＣ597 年の第２回捕囚でバビロンに来たエゼキエルよりも、7 年早くバビロンに来ました。ダニエルは、バビロンのネブカデネザル王からペルシヤのクロス王までの長期間、異邦人の王宮で主なる神を証ししました。

２．著者と成立過程

本書の著者はダニエルです。ダニエル書には奇跡、幻、夢の解き明かしが記されています。ダニエルによる詳細な将来の預言は、歴史の中で正確に成就しています。ダニエル書は、神が歴史の主権者であることを証しし、異教の地にある神の民に対して神への信仰を貫くように励ましました。また、すべての時代の神の民に対して、患難に耐え信仰を全うし、神の国の完成を待ち望むようにと励まします。

３．内容とメッセージ

本書は大きく２つに分けることができます。

1）ダニエルに関する歴史１－6 章　2）ダニエルの預言 7－12 章

①巨大な像の夢　２：３１－３５、黙示２０：１１

ネブカデネザル王の夢を解き明かしたダニエルは、バビロンで高い位に着き王宮で王に仕えることになりました。夢は将来の歴史を預言するもので、次のように解釈できます。金：バビロニヤ、銀：メド・ペルシヤ、銅：ギリシヤ、鉄と粘土：ローマ、一つの石：キリストの王国　将来についての預言は、この後もたびたびダニエル書に出てきますが、正確に歴史の中で成就していきました。

②金の像への礼拝拒否　３：１６－１８、Ｉコリント１０：１４

ネブカデネザル王は、高さ２７ｍの金の像を建て、礼拝を強要しました。しかし、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴは、自分の命を賭けても偶像礼拝をしないとの信仰姿勢を表しました。その結果、彼らは火の炉に投げ込まれましたが、神は彼らを守り、彼らはバビロンの地で、主こそまことの神であることを証ししました。

③ダニエルの祈り　９：１－３、エレミヤ２９：１０

エルサレムでエレミヤによって記されたエレミヤ書の写本は、遠く離れたバビロンにいるダニエルの手元にまで配布されました。ダニエルはエレミヤ書によって、バビロン捕囚が 70 年であることを知り、希望を新たにすると共に、悔い改めと主の赦しを求める祈りをしました。ダニエルは 85 歳位まで生き、クロス王にまで仕えることによって、エルサレム帰還の実現を知る者となりました。

④終末の時代と救いの完成　１２：１，２　マタイ２４：１２－１６

神はダニエルに、神の国の完成の前に患難時代が来ることを教えられました。イエスも同じように、このことを教えられました。患難時代には反キリストが現れ、信者は忍耐を強いられますが、最後にキリストが再臨し、神のさばきが行われ、信者は復活して永遠のいのちに至り、神の救いが完成します。

ホセア書

１．書名

本書はホセアに啓示された預言の書なので、ホセア書と呼ばれています。１７の預言書のうち、イザヤからダニエルの５つは大預言書、ホセアからマラキまでの１２書が小預言書に分類されます。ホセアは北イスラエル王国で活躍した預言者で、ヤロブアムⅡ世の時代からサマリヤ陥落の直前までの約４０年間、預言者として働きました。

２．著者と成立過程

本書の著者はホセアです。ホセアが預言を開始したヤロブアムⅡ世の時代は、外国の脅威からも守られて、平和な時代でした。イスラエルは経済的に繁栄し、物質的に豊かになる一方、偶像礼拝が盛んになり、道徳的に堕落していきました。ヤロブアムⅡ世の死後は、政治的に混乱し、２５年間に６人の王が治めましたが、ＢＣ７２１年にアッシリヤによって北イスラエルは滅びました。ホセアはイスラエルに対して、神のさばきを警告すると共に、神の愛を語り、悔い改めて主に立ち返るようにと語りました。

３．内容とメッセージ

本書は大きく２つに分けることができます。

1）ホセアの家庭生活１－３章　2）ホセアの預言４－１４章

①ホセアの結婚　１：２，３、３：１－３

神はホセアに姦淫の女と結婚するように命じられました。ホセアは主の命令に従い、ゴメルと結婚しました。ゴメルには３人の子供が生まれましたが、主が名付けられた３人の子供の名前は、神のさばきを表すものでした。その後、ゴメルはホセアから離れ去り、姦淫を犯し続けみじめな状態になります。ホセアは主の命によって、ゴメルを買い取り再び妻とします。ホセアは、自分の結婚生活を通して、霊的姦淫を犯し続けるイスラエルに対する神の愛と苦しみを経験し、神の思いを民に告げました。

②さばきと救い　１：１０－２：１、３：４，５

神はホセアに対し、イスラエルに対する神のさばきと共に、終わりの日における神の救いをも伝えられました。神の救いは、救い主によってもたらされ、その時、ユダもイスラエルも、さらには異邦人もキリストをかしらとする新しい神の民の群れである教会に集められます。さらに、キリストを拒むイスラエルも、終わりの日にはキリストを信じて主のもとに立ち返り、こうして神の救いは完成します。

③悔い改めの招き　６：１－３、マルコ１：１４，１５

ホセアは、バアル礼拝を行い、霊的姦淫を続けるイスラエルに対して、神のさばきを伝えると共に、罪の悔い改めのメッセージを語りました。主は悔い改める者には、さばきからの回復を与えられます。主は、悔い改めて主を知る者を祝福し、霊的な暗闇の中に神の光を与え、霊的に乾いた地に恵みの雨を降り注ぐと約束しておられます。

④真実な悔い改め　１０：１２、ローマ３：２２

神が求めておられる悔い改めは、口先だけの表面的な悔い改めではありません。真実な悔い改めとは、心の底まで深く掘り起こし、徹底して罪を悔い改め、主を求めることです。そのような悔い改めには、悔い改めにふさわしい実が伴います。神は、真実に悔い改める者のところに来て、ご自身の義を注がれます。

ヨエル書

１．書名

小預言書の第２番目はヨエル書です。本書はヨエルに啓示された預言の書なので、ヨエル書と呼ばれています。ヨエル書には、時代背景がわかる直接的な記述はありませんが、祭司が国家の中心的役割を果たしていることから、南ユダ王国のヨアシュ王の時代ではないかと考えられています。ヨアシュは７才で王となったため、政治の実権は祭司エホヤダが握っていたからです。ヨエルは、南ユダに対して悔い改めを語った預言者です。

２．著者と成立過程

本書の著者はヨエルです。預言者ヨエルは、ＢＣ８３０年頃、南ユダで活躍したと考えられています。彼は、当時起きたいなごの大群による災害は神のさばきであり、さらに大きな神のさばきが来る前兆であると解きました。そして、神のさばきから逃れるために、悔い改めるようにと語りました。ヨエルは、神のさばきの日を主の日と呼び、主の日が近づいているので、悔い改めて救いを得よと民に語りました。

３．内容とメッセージ

本書は大きく２つに分けることができます。

1）いなごの災害と悔い改めのメッセージ　１：１－２：２７

2）主の日における神のさばきと救い　２：２８－３：２１

①いなごの災害　１：４，１４，１５　Ⅱペテロ３：１０

ヨエルの時代に起きたいなごによる災害は、大きな被害をユダにもたらしました。ヨエルは、この災害は神のさばきであり、さらに大きな神のさばきが来る前兆であると語りました。将来的な神のさばきとは、近い将来の外国の軍隊による攻撃と、終末における神のさばきが２重写しされています。ヨエルはその神のさばきの日を主の日と呼び、主の日が近いので悔い改めるようにと語りました。

②悔い改めと神の救い　２：１２，１３，ローマ３：２４

ヨエルは民に、主の日は近いので、悔い改めて主に立ち帰るようにと勧めました。なぜなら、主は情け深く、恵み豊かで、悔い改める者には災いを思い直してくださる方だからです。神の救いは、究極的にイエスの贖いによって成就しました。イエスの贖いは、悔い改めて主に立ち帰るすべての者に、ただ神の恵みによって与えられます。

③聖霊の注ぎ　２：２８－３２ａ、使徒２：１７－２１

ヨエルの最大の預言は、終りの日に主を信じるすべての人に聖霊が注がれるという預言です。この預言はペンテコステの日に成就しました。旧約時代は、聖霊は特定の人に特定の時に注がれました。しかし、終りの日に救い主が来られると、主を信じるすべての人に聖霊が注がれます。私たちも、主イエスを信じた時に聖霊が心に注がれ、聖霊は、私たちのうちに内住しておられます。

④主の日の救い３：１８，黙示２２：１，２

神の救いは、近い将来においては、神がユダの敵をさばかれることによってもたらされます。そして、終末の主の日には、神の審判後にもたらされます。主の日は神を信じない者にとってはさばきの時ですが、神の民にとっては救いの完成の日であり、永遠の都エルサレムに入る日です。そこには、エゼキエルが預言し、ヨエルが預言したいのちの水の川が流れています。

アモス書

１．書名

小預言書の第３番目はアモス書です。本書はアモスに啓示された預言の書なので、アモス書と呼ばれています。アモスは、南ユダのテコアで牧者として、また農夫として働いていましたが、預言者の召しを受けて、北イスラエルに行って預言しました。ヤロブアムⅡ世（ＢＣ793～753）の時代に預言をしたアモスは、同じく北イスラエルで預言をしたホセアと時代が重なっています。

２．著者と成立過程

本書の著者はアモスです。アモスが活躍したヤロブアムⅡ世の時代のイスラエルは、外国からの侵略もなく、領土は拡大し、平和で繁栄した時代でした。しかし、豊かさを楽しんだのは一部の上流階級だけで、民衆は貧しく、圧政に苦しみ、虐げられていました。また、道徳は乱れ、社会悪が増大し、偶像礼拝が行われていました。アモスはこのようなイスラエルに対して、神のさばきを語り、悔い改めて主を求めるようにと語りました。

３．内容とメッセージ

本書は大きく４つに分けることができます。

1）諸国に対する神のさばき　1－2 章　2）イスラエルに対する神のさばき 3－6 章

3）5 つの幻による神のさばきの啓示　7:1－9:10　4）イスラエルの回復　9:11－15

①神のさばきの宣告　２：６，ローマ３：１９

1，2 章では、「…の犯した三つのそむきの罪、四つのそむきの罪のために、わたしはその刑罰を取り消さない。」という定式を用いて、諸国に対する神のさばきが告げられます。イスラエルの罪は、富める者が金のためには貧しい人を売るほどの不義が満ちていることでした。神はすべての人をご自分の義をもってさばく全世界の主です。

②公義と正義　５：２４　使徒１０：３４，３５

５：２４はアモスの中心メッセージです。イスラエルには公義も正義もなく、表面的には国が栄えていても、内側は罪に満ちていました。この状況が続けば、この国は神のさばきによって滅んでしまいます。アモスは、イスラエルの罪を指摘し、悔い改めて、公義と正義を川のように流れさせよと、民に訴えました。

③主のことばのききん　８：１１　マタイ１３：８，９

アモスは、神のさばきについての五つの幻を受けました。第３の幻の後で、祭司アマツヤはアモスに預言を止めるように命じました。その後の第４の幻の中で、やがて主のことばを聞くことのききんが来るとアモスは預言しました。主のことばを聞かないと、やがてみことばを全く聞けなくなるという神のさばきがやってきます。主のみことばが語られるときに、心をかたくなにせず、聞き従うことが大切です。

④イスラエルの回復　９：１１，１２　使徒１５：１６－１８

アモスは、主のことばを聞かないイスラエルは滅びると預言すると共に、最後にイスラエルの回復の希望を語りました。このイスラエルの回復はイスラエルの国の再建の預言であると共に、救い主イエスを信じるすべての人が属する新しい霊的イスラエルが建てられるとの預言でもあります。ヤコブは、エルサレム会議でこのアモスの預言を引用し、イエスを信じる異邦人の救いは神の計画であると語りました。

オバデヤ書

１．書名

小預言書の第４番目はオバデヤ書です。本書はオバデヤに啓示された預言の書なので、オバデヤ書と呼ばれています。オバデヤ書は１章しかない旧約聖書で最も短い書物です。オバデヤ書の中心テーマはエドムに対する神のさばきです。エドムはヤコブの兄エサウの子孫であり、新約時代にはイドマヤと呼ばれていました。エドムとイスラエルは絶えず敵対関係にありました。イエスのいのちを狙ったヘロデ大王はイドマヤ人でした。

２．著者と成立過程

本書の著者はオバデヤです。オバデヤの人物像や活躍した時代については、本書では何も記されていません。時代背景については２つの説がありますが、どちらにおいても決定的な証拠はありません。①ユダの王ヨラムの時代（ＢＣ849～842）にペリシテ人とアラビヤ人がユダに侵略し、エドムがユダの支配から脱した時のこと。（Ⅱ歴代21:4-17）②バビロンがユダを攻撃し、エルサレムが陥落した時に、エドムがバビロンの手下としてユダを攻めた時のこと。

３．内容とメッセージ

本書は大きく３つに分けることができます。

1）エドムに対する神のさばき　1-14 節　2）全世界に対する神のさばき 15,16 節

3）主の救い 17-21 節

①エドムの高慢　３，４　ローマ９：１３

エドムの首都セラは、切り立った岩壁の高台にあり、難攻不落の町と信じられていました。その結果、そこに住むエドム人は高慢になり、誰も自分たちを攻めることはできないと言っていました。それに対してオバデヤは、主がエドムを引き下ろし、同盟者によって攻め滅ぼされるという神のさばきを伝えました。イドマヤはＡＤ70 年のエルサレム陥落とともにその歴史を閉じました。

②エドムの罪　１０，１１　詩１３７：７

イスラエルが他国人から攻められ略奪された時、エドムはイスラエルの滅びを喜び、自ら略奪に参加しました。実際に、バビロン軍がエルサレムを攻めた時、エドムはバビロン軍と共にエルサレムを攻めました。神はこのエドムの罪を覚え、それに対するさばきを行うと語られました。

③主のさばき　１５，１６　Ⅱペテロ３：１０

主の日は、主を信じる者には救いの日ですが、主に逆らう者にはさばきの日です。オバデヤは、やがて神がエドムだけでなく、すべての国々をさばかれる日が来ると預言しました。主の日は最終的にはイエスの再臨の日であり、最後の審判の日です。主の日が私たちにとって救いの日となるためには、ただ主イエスを救い主と信じて救われる以外にありません。

④主の救い　２１　黙示１１：１５

主の日は、神の民にとっては救いの日です。その日、エルサレムは聖別され、イスラエルは回復し、神はイスラエルを救われます。オバデヤの預言は、捕囚後のイスラエルの回復時に成就するとともに、究極的にはイエスの再臨の時に成就します。なぜなら、その時「王権は主のものとなる」という神の統治が完全に実現するからです。

ヨナ書

１．書名

小預言書の第５番目はヨナ書です。本書は小預言書の中で最も親しまれている書物です。他の小預言書は、預言者を通して啓示された神の預言の書ですが、ヨナ書はヨナの身に起こったことを伝記風に書き記した書物となっています。ヨナ書のテーマは、ヨナに異邦人伝道を命じられた神の全世界に対する愛と救いのご計画です。

２．著者と成立過程

本書の著者はヨナです。ヨナは北イスラエルのヤロブアムⅡ世(BC793-753)の時代に活躍した預言者で、イスラエル領土の回復を預言しました。(Ⅱ列王 14:25)　当時、アッシリヤはイスラエルの存在を脅かす敵国でした。ヨナはイスラエルに対する愛国心から、アッシリヤの滅亡を願っていました。ところが、ヨナは神からアッシリヤの首都ニネベに行って伝道するようにと命じられました。ヨナ書は、ヨナの偏狭な愛国心の間違いと全世界の救いを願われる神の大きな愛が教えられています。

３．内容とメッセージ

本書は各章ごとに４つに分けることができます。

1）ニネベ伝道への神の命令とヨナの逃避　１章　2）大魚の中でのヨナの祈り　２章
3）ヨナのニネベ伝道とニネベの悔い改め　３章　4）ヨナの怒りと神の答え　４章

①ニネベ伝道の命令　１：１－３　マルコ１６：１５

ヨナは、神からニネベ伝道の命令を受けたにも関わらず、これを拒んでタルシシュへ逃げようとしました。アッシリヤはイスラエルの敵国であるので、ヨナはアッシリヤが救われるよりも滅びることを願っていたからです。しかし、神はアッシリヤが悔い改めて救われることを願われました。ヨナは船に乗っても神から逃げることはできず、ヨナの乗った船は嵐に会い、彼は嵐の海に投げ込まれてしまいました。

②大魚の中での祈り　１：１７－２：２　マタイ１２：３９，４０

ヨナは嵐の海で、もがき苦しみながら神に救いを叫び求めました。神はヨナの叫びを聞き、大きな魚を備え、魚はヨナを飲み込みました。ヨナは魚の腹の中で悔い改め、神に従う決心をしました。主は三日後に魚に命じてヨナを陸地に吐き出させました。ヨナのこの経験は、３日目によみがえるイエスの復活を予表する出来事となりました。

③ニネベ伝道とニネベの悔い改め　３：１０　マタイ１２：４１

ヨナは神の命令に従い、ニネベに行き、「もう４０日するとニネベは滅ぼされる」という神のさばきのメッセージを伝えました。すると、ニネベの人々は身分の高い者も低い者も、王に至るまで悔い改めました。神はニネベの人々の悔い改めをご覧になり、下そうとしておられた災いを思い直されました。神はどの国の人であっても、悔い改める者にはあわれみ深く、その人を救われます。

④神の愛　４：１０，１１　Ⅰテモテ２：４

ヨナは敵国アッシリヤの救いを喜ぶことはできず、アッシリヤを救われた神に怒りを覚えました。そのようなヨナに対し、神は１本のとうごまを通して、ヨナの自己中心な愛を戒められました。神はすべての人を愛され、すべての人が悔い改めて救われることを願っておられます。そのために、神は愛する御子を救い主としてお与えくださいました。だからこそ、私たちは福音を全世界に宣べ伝えなければなりません。

ミカ書

１．書名

小預言書の第６番目はミカ書です。本書はミカに啓示された預言の書なので、ミカ書と呼ばれています。預言者ミカは南ユダのモレシェテ・ガテ出身のモレシェテ人であり、南ユダのヨタム、アハズ、ヒゼキヤの３人の王の治世（BC742-686 年）に活躍しました。ミカはイザヤと同時代に、南ユダで預言活動を行いました。そのため、ミカ書とイザヤ書には類似点を見出すことができ、ミカ書にも大切な救い主の預言がなされています。

２．著者と成立過程

本書の著者はミカです。ミカは北イスラエルの罪を指摘し、神のさばきを語ると共に、南ユダにも同じ罪があり、神のさばきが来ると預言しました。エレミヤ 26:18,19 は、ミカの預言を聞いたヒゼキヤが、主を恐れて宗教改革を行ったことを記しています。しかし、その後ユダは堕落し、ミカの預言通り、バビロン軍によってエルサレムは廃墟となりました。しかし、ミカは、神は残りの民を集め、救い主の来臨によって神の救いが完成すると預言しました。

３．内容とメッセージ

本書は大きく４つに分けることができます。

1）イスラエルとユダに対する神のさばき　1－3 章　2）終末における神の国 4，5 章
3）神とイスラエルの論争　6 章　4）ミカの祈り　7 章

①残りの者への約束　２：１２，１３　ヨハネ１０：４

ミカはイスラエルとユダの罪を指摘し、神のさばきを語った後、残りの者に対する神の救いの約束を語りました。神は終わりの日に、ご自分に忠実な残りの民のために救い主を遣わされます。救い主は、罪の縄目を打ち破って民を救い出されます。そして、彼らの主なる王として彼らの先頭に立って進まれ、神の民を導かれます。

②神の栄光の王国　４：１－３　イザヤ２：２－４

この個所は、イザヤ書と共通する終末についての預言です。神は終わりの日に異邦人も含めすべての主の民を、主の教えを聞くためにエルサレムに集められます。その時、エルサレムにいます主は、すべての国を治め、国際間の問題は剣によらず主のさばきによって解決します。そのような神の支配は、主イエスの再臨によって成就します。

③救い主の誕生　５：２　マタイ２：４－６

ミカは神が遣わされる救い主はベツレヘムで生まれることを預言しました。ベツレヘムは、ダビデの出身地でしたが、ユダの中でも小さな町でした。イスラエルを支配する救い主は、主の救いのご計画を完成させるためにベツレヘムで生まれるのです。そして、イエス・キリストがベツレヘムでお生まれになったことにより、主の預言は確かに成就しました。

④公義と誠実　６：８　３：９－１２

ミカは 3 章において、為政者、祭司、預言者たちに対して、公義を行わずに悪を行い、それでいて災いは来ないと言っている彼らの罪を指摘し、神のさばきを宣言しました。そして、6 章でミカは、神は何を求めておられるのかを教えました。それは、公義（神の正しさ）を行い、誠実（神の契約への忠実）を愛し、へりくだって神と共に歩むことです。それこそ、どのようないけにえよりも神が求めておられるものなのです。

ナホム書

１．書名

小預言書の第７番目はナホム書です。本書はナホムに啓示された預言の書なので、ナホム書と呼ばれています。（１：１）ナホム書のテーマは、ニネベに対する神のさばきです。ナホム書よりも百数十年前に書かれたヨナ書では、ヨナの説教によってニネベは悔い改めたので、神はニネベを救われました。しかし、その後、ニネベは再び高慢になり、罪を犯し続けました。神はナホムを通して、ニネベをさばき滅ぼすと宣告されました。

２．著者と成立過程

本書の著者はナホムです。ナホムはＢＣ630～620 年頃に預言者として活躍しました。ヨナの時代（ヤロブアムⅡ世の時代ＢＣ793～753）の後、アッシリヤは次々に周りの国々を支配し、巨大な帝国を築きました。北イスラエルもＢＣ721 年にアッシリヤによって滅ぼされました。しかし、神はアッシリヤの犯した罪を見過ごさず、ニネベを滅ぼすとナホムによって語られました。そのとおり、ＢＣ612 年にバビロニヤとメディヤの連合軍によって、ニネベは陥落し、アッシリヤは滅びました。

３．内容とメッセージ

本書は各章ごとに３つに分けることができます。

1）復讐する神　１章　2）ニネベの滅亡　２章　3）ニネベの罪と罰　３章

①復讐する神　１：２，３　ローマ１２：１９

アッシリヤは、ヨナの時代の後、再び高慢になり、残虐非道な暴力行為をもって、周りの国々を滅ぼし、巨大な帝国を築きました。神はヨナの時代からニネベ滅亡までの百数十年間、忍耐深く待たれましたが、アッシリヤは罪を犯し続けました。神はついに、ナホムをとおして、アッシリヤの罪に対して復讐すると告げられました。

②神の民の救い　１：１５　ローマ１０：１５

北イスラエル滅亡後、南ユダもアッシリヤの激しい攻撃を受け、多くの都市が破壊されました。しかし、神はエルサレムをアッシリヤ軍から守られました。けれども、アッシリヤはユダにとって引き続き脅威となっていました。ですから、アッシリヤの滅びはユダにとっては救いの良い知らせとなったのです。今日、私たちはすべての人にとっての良い知らせである福音を伝える者とされています。

③ノ・アモンとニネベ　３：７，８　ルカ１３：３

ノ・アモンとはアッシリヤによってＢＣ６６３年に滅ぼされたエジプトの首都テーベのことです。テーベは強固な町でしたが、アッシリヤによって陥落しました。しかし、ナホムはテーベとニネベを比較し、神はやがて強固な町ニネベも滅ぼすと預言しました。テーベの遺跡には今もルクソール神殿や王家の墓などが残っています。

④ニネベの滅び　３：１８，１９　ローマ１１：２２

強大な勢力を誇ったアッシリヤも次第に勢力が衰え、ＢＣ６１２年にバビロニヤとメディヤの連合軍によって、ニネベは陥落し、アッシリヤは滅びました。アッシリヤは歴史に残る残虐行為を行って他国を支配しました。神はそのアッシリヤの罪を見過ごさず、アッシリヤに復讐されたのです。１８４２年、英仏の学者によってニネベは発掘され、当時の偉大な都市の遺跡が世に現わされました。

ハバクク書

１．書名

小預言書の第８番目はハバクク書です。本書はハバククに啓示された預言の書なので、ハバクク書と呼ばれています。（１：１）ハバクク書のテーマは、ユダに対する神のさばきとバビロンに対する神のさばきです。南ユダはヨシヤ王の死後、再び神に逆らい悪に満ちました。ハバククがユダの罪を神に訴えると、神はカルデヤ人（バビロン）によってユダを滅ぼし、やがてはカルデヤ人を滅ぼしてユダを救うと告げられました。

２．著者と成立過程

本書の著者はハバククです。南ユダはヨシヤ王の死後、エホヤキム王の時代になると再び神に逆らい、暴行と暴虐に満ちる国となりました。ハバククはその状況を神に訴え、神の答えをいただいた預言者であり、エレミヤと同時代に南ユダで働きました。バビロンの滅亡を預言したハバクク書は、アッシリヤの滅亡を預言したナホム書やエドムの滅亡を預言したオバデヤ書と対比されます。

３．内容とメッセージ

本書は大きく３つに分けることができます。

1）ハバククと神との問答　１：１－２：４　2）ハバククへの神の啓示　２:５－２０

3）ハバククの祈り　３章

①ハバククの訴えと神の答えⅠ　１：２，６　黙示６：９，１０

ハバククは、ユダの罪を神に訴えているのに、なぜ神は聞いてくださらないのかと訴えました。それに対して、神はカルデヤ人を起こしてユダをさばくと答えられました。カルデヤ人（バビロン）は、ＢＣ６０９年にアッシリヤを滅ぼした民族です。そのカルデヤ人を用いて、今度はユダをさばくと神は告げられたのです。

②ハバククの訴えと神の答えⅡ　１：１３，２：４　ローマ１：１７

ハバククは神の答えに対して、さらなる疑問を訴えました。それは、なぜ聖なる神が神を信じない異邦人を用いて、神の民をさばくのかという問いでした。それに対する神の答えは、「正しい人はその信仰によって生きる」というみことばでした。どんなにバビロンが攻めて来ても、正しい人は信仰によって生きることができるのです。キリストの十字架のみわざを知ったパウロは、このみことばが教える信仰義認の真理を解き明かしました。ルターもこのみことばによって信仰義認の真理に目覚めたのです。

③バビロンに対する神のさばき　２：８　ローマ１１：３３

神はユダをさばくためにバビロンを用いられます。しかし、その後、神は心高ぶるバビロンをさばくと告げられました。バビロンに対する神のさばきは、ユダにとっては神の救いとなるのです。実際に、バビロンはＢＣ５３９年にペルシヤによって滅ぼされ、クロス王の勅令によりユダヤ人はエルサレムに帰還することができました。神は心高ぶる者を滅ぼし、信仰によって生きる義人を生かされるのです。

④神への信頼　３：１７－１９　ローマ５：２

バビロンが滅びる前に、神はバビロンを用いてユダを滅ぼされます。しかし、それでもハバククは神に信頼し、救いの神を喜ぶと言って神を賛美しました。ハバククの神に対する最初の疑問は、神の啓示のことばによって解決し、神への絶対的な信頼に至ったのです。義人は信仰によって生きるのです。

ゼパニヤ書

１．書名

小預言書の第９番目はゼパニヤ書です。本書はゼパニヤに啓示された預言の書なので、ゼパニヤ書と呼ばれています。（１：１）ゼパニヤ書のテーマは、エルサレムと諸外国に対する神のさばき、そして終末の救いの約束です。聖なる神は罪人をさばくと共に、さばきを通して民を悔い改めに導き、救いの祝福を与えようとされました。本書においても、神のさばきと救いが切り離されることなく、共に預言されています。

２．著者と成立過程

本書の著者はゼパニヤです。ゼパニヤはヒゼキヤ王の４代目の子孫に当たります。主に信頼したヒゼキヤの後、マナセとアモンの時代になると、南ユダは異教信仰を取り入れ、エルサレムは偶像で満ちていました。ゼパニヤはそのように霊的に堕落しているユダに対して、神のことばを語りました。ゼパニヤの預言活動は、アモンの後を継いだヨシヤの宗教改革に影響を与えたと考えられます。

３．内容とメッセージ

本書は大きく３つに分けることができます。

1）エルサレムに対する審判 １：１－２：３　2）諸外国に対する審判 ２:４－３：８
3）終末の救いの約束　３：９－２０

①エルサレムに対する審判　１：４　Ⅱ歴代３３：１－３

主に信頼したヒゼキヤの死後、王となった息子マナセは偶像礼拝を行い、神殿に偶像を安置して、主に罪を犯しました。次のアモンの治世は２年でしたが、彼もマナセの道に歩みました。次のヨシヤの治世の初期も、南ユダはマナセの罪の影響下にありました。そのような状況の中でゼパニヤは、神のさばきの日は近いと預言しました。

②悔い改めの勧め　２：３　Ⅱ歴代３４：１－３

ゼパニヤは神のさばきを宣言すると共に、悔い改めを民に勧めました。ヨシヤ王はゼパニヤの悔い改めの勧めに応答し、自ら主を信じると共に、宗教改革を行ったと考えられます。そして、ヨシヤの宗教改革はダニエルたちに影響を与えたと考えられます。ヨシヤの死後、ユダは再び霊的に堕落し、２３年後にはエルサレムは陥落します。しかし、バビロン捕囚の民の中に、主に信頼する残りの民が備えられました。

③終末の救い　３：９　使徒２：９－１１

ゼパニヤは、エルサレムだけでなく諸外国に対する神のさばきを預言しました。そして、その後に神の救いが来ると預言しました。３：９の預言は、ペンテコステの日に成就しました。キリストの救いは、聖霊の力を受けた主の弟子たちによって全世界に伝えられ、すべての国民に証しされます。そして、預言どおり、国々の民が主の御名によって祈り、一つになって主に仕える教会時代が訪れたのです。

④救いの喜び　３：１４，１５　ヨハネ１：４９

神のさばきの宣告で始まったゼパニヤ書は、喜びの歌声で終わります。それはイスラエルの王なる主が、民のただ中におられるという神の救いが与えられるからです。この預言は救い主イエス・キリストの来臨によって成就しました。主の臨在の約束は、イエスの地上での生涯に成就しただけでなく、イエスを主と信じるすべての者に成就します。だから、私たちも主にあって喜び歌う者となりました。

ハガイ書

１．書名

小預言書の第１０番目はハガイ書です。本書はハガイに啓示された預言の書なので、ハガイ書と呼ばれています。（１：１）ハガイ、ゼカリヤ、マラキの各書は、捕囚後の時代を取り扱っています。ハガイは、１８年間中断していた神殿再建工事を再開するようにとの神のことばを民に告げました。ハガイの預言を聞いた民は、神のことばに聞き従い、神殿再建工事を再開しました。

２．著者と成立過程

本書の著者はハガイです。ＢＣ５３８年、ペルシヤのクロス王の勅令により、最初に４万２千人の民がバビロンからエルサレムに帰還しました。彼らは帰国後すぐに神殿再建工事に着手しました。しかし、サマリヤ人たちの妨害に会い、工事は１８年間中断してしまいました。その間に民の関心は自分たちの生活のことに向けられ、神殿に対して無関心になってしまいました。そのような民に対して、ハガイは今こそ神殿を建て上げる時だと語り、ハガイの預言によって、神殿再建工事は再開しました。

３．内容とメッセージ

本書にはハガイに対する４回の神のメッセージが記されています。

1）第１のメッセージ １：１－１５　　2）第２のメッセージ ２:１－９

3）第３のメッセージ２：１０－１９　4）第４のメッセージ２：２０－２３

①神殿再建工事の再開　１：７，８　エズラ４：２４－５：２

神殿再建工事が中断し 18 年が経つと、民は神殿に対する熱意を失い、自分たちの生活を中心とする生き方をしていました。しかし、その結果は神の祝福と繁栄を失うものでした。そのような状況の中で、神はハガイを通して「あなたがたの現状をよく考えよ。」と語られ、工事の再開を促されました。この主のことばに民は応答し、神殿工事は再開されました。

②ゼルバベルの神殿　２：３－５　エズラ６：６－８

神殿工事再開１ヶ月後、壮大なソロモンの神殿を見たことのある人たちから失望の声が上がりました。また、再びサマリヤ人たちの妨害も起こりました。それに対してハガイは、「強くあれ。仕事に取りかかれ。わたしがあなたがたとともにいるからだ。」との神のことばを伝えました。その後、ダリヨス王はサマリヤ人たちによる工事の妨害をやめさせ、ペルシヤの国費をもって、神殿再建を行うようにと命じました。

③未来の栄光　２：９　ルカ２：４６－４９

ゼルバベルの神殿は壮大なソロモンの神殿に比べると、みすぼらしいものでした。しかし神は、この宮のこれから後の栄光は、先のものよりまさろうと約束されました。なぜなら、やがてこの神殿に神の御子イエス・キリストが来られるからです。イエスは十字架の死によって、罪の贖いを成し遂げ、神との平和を築いてくださいました。

④ゼルバベルへの約束　２：２３　マタイ１：１２，１３

ゼルバベルの神殿再建の働きは、救い主をお迎えする準備でもありました。神はゼルバベルを選び取り、印形のようにすると約束されました。印形は王の権威の印であり、約束を保証するものです。神は、ダビデの子孫として来られる救い主は、ゼルバベルの家系から生まれることを保証されました。

ゼカリヤ書

１．書名

小預言書の第１１番目はゼカリヤ書です。本書はゼカリヤに啓示された預言の書なので、ゼカリヤ書と呼ばれています。（１：１）ゼカリヤはハガイと同時代に、神殿再建のために民を励ました預言者でした。ゼカリヤ書には多くの幻が記されており、エゼキエルやダニエルと共に、幻を見る預言者と呼ばれています。また、新約聖書に最も多く引用されている書物であり、イザヤ書の次にメシヤ預言の多い書物でもあります。

２．著者と成立過程

本書の著者はゼカリヤです。ゼカリヤはハガイの預言開始２カ月後、ダリヨス王の第２年の第８の月から預言を始めました。ハガイの預言は神殿再建に焦点が当てられましたが、ゼカリヤは民の罪にまで焦点を当てて、神に対する悔い改めと従順を語りました。前半は、同時代の民へのメッセージが記され、後半は終末に至るまでの未来に関する預言が記されています。また、多くのメシヤ預言が語られています。

３．内容とメッセージ

本書は前半と後半の二つに大きく分けることができます。

1）同時代へのメッセージ　１－８章　　2）未来に関する預言　９－１４章

①ゼルバベルへの主のことば　４：６　使徒１：８

１－６章には８つの幻が記されています。４章は５つ目の「燭台と２本のオリーブの木」の幻です。ゼカリヤがこの幻の意味を御使いに尋ねると、御使いは「権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。」というゼルバベルへの主のことばだと答えました。２本のオリーブの木は、聖霊の油を注がれたゼルバベルとヨシュアであり、燭台である民に聖霊の油を注いで、神殿を完成させることができるのです。神の働きは、今も聖霊の力によって成し遂げられます。

②ろばに乗って来られる救い主　９：９　マタイ２１：４－７

ゼカリヤはメシヤ預言を多く語りました。９章では、救い主はろばに乗って来られると預言しました。そして、救い主は平和を告げ、世界を治められるのです。この預言は、イエス・キリストのエルサレム入城において成就しました。イエスは十字架の死によって救いを成し遂げ、神との平和を築かれた全地の王です。

③キリストの受難と悔い改め　１２：１０　ヨハネ１９：３７

ゼカリヤは、キリストの受難とそれを見た人々の嘆きと悔い改めを預言しました。主が民に注がれる恵みと哀願の霊とは、悔い改めの霊です。また「自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見」とは、神の御子の受難のことです。主が民に悔い改めの霊を注がれるとき、民は神の御子を十字架に付けたことを嘆き、悔い改めてイエスを救い主と信じるのです。このことはペンテコステの日に悔い改めた人々のうちに起こり、また、あらゆる時代に主を信じる民のうちに起こります。

④主の再臨　１４：４　使徒１：１１，１２

ゼカリヤは、終末には大患難が起こり、エルサレムは総攻撃されると預言しました。しかし、その時キリストは地上に再臨され、オリーブ山に立たれます。その時、義の太陽なる主が地上に臨在され、エルサレムから湧き水が流れ出て、主は地のすべての王となられ、キリストの王国が完成します。

マラキ書

１．書名

小預言書の第１２番目、そして旧約聖書最後の書物はマラキ書です。本書はマラキに啓示された預言の書なので、マラキ書と呼ばれています。（１：１）マラキの活躍した時代は、エズラとネヘミヤの宗教改革（ＢＣ４５８～４３２）が行われる少し前のＢＣ４６０～４５０年頃と考えられています。ＢＣ５１５年に神殿は完成しましたが、民が期待するような目に見える祝福が来なかったため、民は再び不信仰に陥りました。そのようなイスラエルに対して、マラキは神に立ち返るようにと預言しました。

２．著者と成立過程

本書の著者はマラキです。マラキの時代、イスラエルは再び不信仰に陥り、信仰は形式化していました。祭司たちは堕落し、汚れたささげものを主にささげ、律法を正しく民に教える務めを果たしませんでした。また、民のうちには経済的有利さを求めて、ユダヤ人の妻と離婚し、異邦人の妻をめとる者が多くいました。マラキは、そのような民の罪を指摘し、悔い改めて神に立ち返るようにと語りました。

３．内容とメッセージ

本書は四つに大きく分けることができます。また、対話形式が本書の特徴です。

1）イスラエルに対する神の愛１：１－５　2）イスラエルの罪１：６－２：１７

3）神のさばきと悔い改め　３章　4）主の日と預言者エリヤ　４章

①イスラエルに対する神の愛　１：２，３　ローマ５：８

神はイスラエルに対するご自身の愛をまず伝えられました。しかし、民は「どのように、あなたが私たちを愛されたのですか。」と問い返しました。それに対して、神は「わたしはヤコブを愛した。」と言って、神の一方的な選びの愛を伝えられました。また、「エサウを憎んだ。」とも言われ、神の祝福に無関心なエサウに対するさばきを語られました。神の愛を信じて、神に立ち返ることこそ必要なのです。

②神のさばき　２：１７－３：２　黙示６：１７

マラキは、祭司と民の罪を指摘しました。しかし民は、私たちは神を煩わしたことはないと言い、さばきの神はどこにいるのかとくってかかりました。それに対して、神はさばき主を遣わすと語られました。この預言は、キリストの初臨と再臨の両方が語られています。主の道を整える神の使者とはバプテスマのヨハネのことです。

③悔い改めの勧め　３：７－１０　マタイ６：３３

神は民に悔い改めて、神に帰るようにと勧められました。そして、どのようにして帰ろうかと言う民に対して、十分の一のささげものをもって、神に帰れと告げられました。十分の一の奉納物を神にささげることは、神に対する信頼を表すことです。神に信頼する信仰をもって、神に立ち返ることが求められているのです。神は今も、十分の一献金をもって神への信頼を表すようにと、私たちにチャレンジしておられます。

④預言者エリヤ　４：５，６　マタイ１１：１４

旧約聖書最後のことばは、預言者エリヤ到来の預言です。この預言はバプテスマのヨハネの到来において成就しました。彼は父なる神と子なるイスラエルの関係を回復させるために、救い主の来臨の前に神から遣わされます。旧約の預言は終了しました。そして新約時代の幕開けは、預言どおりバプテスマのヨハネの到来から始まりました。